［翻　訳］

エンプソン稿　柳田芳伸訳

「マルサス氏の生涯，著作，および性格」

柳　田　芳　伸

訳者序言

ここに訳載しようとするのは，『エディンバラ・レヴュー（Edinburgh Review）』の第64巻第130号（1837年１月）の469-506頁に掲載されているエンプソン（Empson，William，1791-1852）稿「マルサス氏の生涯，著作，および性格」[1)]（── 以下，便宜上『性格』と略記）の全訳である。『性格』はマルサスの第２版『経済学原理』（1836年）に対する書評という体をとってはいるけれども，論題通り，マルサスの一生涯に限らず，『人口論』を中心とした諸著作の特徴についても，独自的観点から整理，概説している。この点，エンプソンは第２版『経済学原理』に収録されているオッター師（Otter，Rev. William，1768-1840）の筆になる「ロバート・マルサス回顧録」を巧みに利用しながらも，他方ではこれを十二分に意識して，筆を進めているように思われる（93，140頁）。

今日までに公表されているマルサスの全生涯[2)]を取り扱った作品としては，上記のオッターによる回顧録を嚆矢に，『性格』，ボナア（Bonar，James，1852-1941）著堀経夫・吉田秀夫訳『マルサスと彼の業績（第２版，1924年刊）』[3)]（改造社，1930年），ケインズ著大野忠男訳『ケインズ全集第10巻，人物評伝（初版，1933年刊）』（東洋経済新報社，1980年）第12章，南亮三郎著『マルサス評伝』（千倉書房，1966年），Patricia James,

Population Malthus（London：Routledge & Kegan Paul，1979），及びジョン・プレン（Pullen，John Michael）著溝川喜一・橋本比登志編訳『マルサスを語る』（ミネルヴァ書房，1994年）第１講などが列挙できる。以下では，『性格』がこれらの諸研究の中でどのような相対的特色を有しているのか多少なりとも考えてみたい。

その糸口として，まずエンプソン（図１を参照）の略伝を振り返り，確認しておきたい[4)]。

図１　ウィリアム・エンプソン

（出典）Plate 8-(c) between page 240 and page 241，in James，Patricia，*Population Malthus*（London：Routledge & Kegan Paul，1979）より。

エンプソンは牧師アメジア（Empson, Rev. Amaziah，1755-1798）の息子として生れ，ウィンチェスター・カレッジで後にラグビー校校長となったアーノルド（Arnold，Thomas，1795-1842）らと机を並べた。その後，法律家を志しケンブリッジのトリニティ・カレッジに入学し，1812年に文学士となり，ついで15年には文学修士を取得した。19年には，晴れて法廷弁護士の仲間入りを果し，リンカンズ・インの一員として活躍するに至った。また24年にはマッキントッシュ（Mackintosh，James，1756-1832）の後を継いで，一般政治とイングランド法の担当教授として東インド・カ

レッジに就任した。カレッジでは，25歳年上の同僚であるマルサスから何くれとなく目をかけられ，マルサスが昇天し，空家となったカレッジ内のマルサスの旧居宅に移り住んだりもした[5)]。加えて，33年６月には，マルサスやジョーンズ（Jone, Richard, 1790-1855）と共に，新設されたばかりの英国科学振興協会の統計協会の正規会員14名のうちの１人ともなった[6)]。

他方，エンプソンは1823年に『エディンバラ・レヴュー』に寄稿したのを機縁に，同誌や，その編集長で，1807年以来マルサスと親交を続けてきていたジェフリー（Jeffrey, Francis, 1773-1850）との関係を深めていく。29年にはジェフリーの後任として編集長となったネーピア（Napier, Macvey, 1776-1847）を手助けすることになり，事実上，ロンドンにおける『エディンバラ・レヴュー』の副編集長としてその才覚を発揮した。さらに38年６月27日には，ジェフリーに嘱望され，その一人娘のシャルロット（Charlotte）と結婚し[7)]，ネーピアが他界した後には，ついに『エディンバラ・レヴュー』の編集長の地位を託された。けれども52年12月10日に，ヘリベリーの地で，インフルエンザのため急死した。なおその風体は，長軀痩身で，顔面中に多くのしわをひそめ，かつ両碧眼（へきがん）の上部には毛深いまゆ毛がそれぞれ横たわっていたと描写されている。

以上のようなエンプソンの小伝から，エンプソンがマルサスやマルサスの友人であるジェフリーから言い尽くせぬ恩愛を受け，またエンプソンもこれを随喜していたということを知得できよう。それゆえエンプソンは絶大なる敬愛の念をもって『性格』を練り上げていったと推察しても大過ないであろう。

実際，エンプソンは当時入手可能な限りの原資料〔リカードウのマルサス宛私信[8)]，マルサス父子の往復書簡，未刊行の『危機』（1796年）からの抜粋など〕をふんだんに盛り込んで，故マルサスの学究生活の軌跡を丹念に描出しようと努めている。すなわちエンプソンは原典主義に基づいてマルサスの学績を辿り直そうと試みているのである。このゆえに，『性格』

は今日でもなお，オッターによる回顧録と共に，「誰もが知っている典拠」[9]とか，あるいは「有益な貢献をした」[10]評伝とかと併称されているし，かつまた現在でも「マルサスに関する非常に包括的で権威ある伝記」[11]と目されるＰ．ジェイムズ夫人（1917-87年）の大著においても再三再四引用，参照されてもいる[12]。わけても，「私（マルサス）は自分の家族以外で，これほど愛した人（「リカードウ」を指す）は誰もいなかった。」（131頁，但し括引内引用者）という一文から始まる周知の原本の引用[13]や，「マルサス氏は牧師で ── 非常に実直で，純粋な，かつ敬虔なる牧師であった。この類のことは彼の属した特権層の悪徳から完全に切り離してしまうと，理解しそこなう。」（105頁）とするエンプソンの所見は，依然として襲用されている[14]。

また『性格』においては，マルサスが思慮分別，一意専心といった「知的性質」と，穏和で，冷静沈着，かつ公正無私であるといった「道徳的性質」とを兼有していたと一貫して説かれていて[15]，しかもこうした中庸のとれたマルサスの「個人的人間性」という見地[16]（136頁）から，マルサスが政治的中庸主義に立脚した穏和な改革主義者であったことや，あるいは「土地利害集団」と「貧民の利益」との調和や非国教徒への差別の除去を企図しようとしていたマルサスの姿勢などを説明しようとしているように思われる。もとよりこのことは，エンプソンのマルサスに対する過度な敬慕からの僻説であると裁断されるかもしれない。けれども「マルサス学派はまったく形成されていなかった」（133頁）という時勢を考え合わせるなら，むしろエンプソンの果断による達見であったとみる方がより適切であろう。事実，マルサスの『経済学原理』からの，「もしある国が低賃金を求める競争に勝つことだけで富裕になりえるならば，私はただちにそんな富は死滅しろといいたい」（120頁）や，「かつて地代を受取ったこともなく，また受取ろうと期待もしない私が…」（127頁）といった文言の引用はボナーに影響を及ぼしていようし[17]，また『経済学原理』における「富の比例への依存」（99頁）という思慮の指摘は，ケインズ（Keynes, John

Maynard，1883-1946）が後年に最適貯蓄の理論を構築するさいに示唆を与えもしたと推される[18]。

最後に，より科学的であると評断されているマルサス「氏の後期（later）の著作」（138頁）である「第５版『人口論』の実質は『経済学原理』[19]に転移されている」（123頁）と解しているエンプソンの高見[20]にも目を向けておきたい。すなわち，エンプソンは『人口論』の諸版に存する「変更を確認していく作業ほどの大仕事はほかにない」（122頁）ことを了知していたし，また『人口論』に向けられた千差万別の批評を分類，整理してもいた[21]。その上で，エンプソンはマルサスの「後期の著作」においては，「慎慮的抑制」の大衆への普及と「愉楽の標準」の向上との連関性が明瞭に主張されていて（118頁），マルサスの所論では，「結婚は事実上有徳に対するほう賞としてなされ，また愉楽と独立のうちに保持されるよう努力されて，結婚生活は純潔で気品のあるものに維持されるよう願望されていた」（120頁）と断言しているのである。もちろん，仮に近年益々進展，精緻化してきているマルサス研究の現況[22]からこうした見解を一顧すれば，かえってエンプソンの分析や掘り下げの浅薄や不十分さばかりが目立ってくるかもしれない。しかしこうした着想が既に1837年に提出されていたことを想起するなら，むしろエンプソンのこの鋭い活眼に先見の明を認めるべきであろう。

（注）

１）「character」は多義語で，本訳では適宜，「性格」もしくは「評価」という訳語を充用した。

２）なおマルサスの1799年５月～11月の北欧周遊，1802年５月～10月のフランス，スイス，及びイタリアへの探勝，そして1825年６～８月のオランダならびにライン地方への旅行の模様については，小林時三郎「マルサス旅行日記」『文経論叢』第７巻第４号（弘前大学人文学部，1972年），橋本比登志「『人口論』第二版準備期のマルサス」久保芳和博士退職記念出版物刊行会編『上ヶ原三十七年』（創元社，1988年）所収，及び拙論「マルサスの『北欧旅行記』瞥見」『長

崎県立大学論集』第36巻第４号（長崎県立大学学術研究会，2003年）等を参照。またマルサスの東インド・カレッジ教授として側面については，Keith Tribe，“ Professors Malthus and Jones ”，*The European Journal of the History of Economic Thought*，Vol.2，No.2（Aut，1995），赤澤昭三「T．R．マルサスとThe East India College」『東北学院大学論集』第143号（東北学院大学学術会，2000年），赤澤昭三「The East India Collegeの牧師マルサス」『マルサス学会年報』第10号（マルサス学会，2000年），及び拙論「マルサスの東インド・カレッジ擁護論」『長崎県立大学論集』第35巻第４号（長崎県立大学学術研究会，2002年）等を参照。

３）ちなみに伊藤久秋著『マルサス人口論の研究』（丸善，1928年）371-402頁に収められている要を得た小伝は，このボナーの研究によっていると推知される〔ボナア同訳書553頁を参照〕。

４）そのさいの記述は，専ら*Dictionary of National Biography*（Oxford：Oxford Univ. Press，2004），Vol.18，pp.427-8の記事に依拠している。

５）James，*Population Malthus*，p.181。

６）*Ibid*.，p.445。

７）Lord Cockburn，*Life of Lord Jeffrey*（Edinburgh：Adam and Charles Black，1852），Vol.Ⅰ，pp.270，374。

８）ボナーは，エンプソンによる複数の書簡「からの抜粋は彼の論文における最も価値多き部分である」と評している〔ボナア前掲訳書306頁註１〕。なおマルサスからカードウ宛の手紙は1933年頃にスラッファ（Sraffa，Piero，1898-1983）によって『リカードウ文書』の中に発見され，今日では『リカードウ全集VI－IX』（1952年）に収録されている〔中野正監訳『リカードウ全集VI』（雄松堂，1970年）vii，xxix頁，また『ケインズ全集10』131-2頁も参照〕。

９）『ケインズ全集10』96-7頁注１。

10）プレン前掲訳書２頁。また南『マルサス評伝』31頁注16も参照。

11）プレン同上訳書２頁。

12）James，*op. cit*.，pp.22，24-5，51-2，126，209，269，321，338，418-9，424，p.487n.30。また南前掲書53頁やプレン前掲訳書４－５頁も参照。

13）『ケインズ全集10』128-9頁，およびJames，*op. cit*.，p.209。

14）James, *op. cit*.，p.338，およびプレン前掲訳書23頁。

15）但し，オッターもほぼ同様のことを指摘してはいる〔「ロバアト・マルサスの回顧録」依光良馨訳『マルサス経済学原理（下）』（春秋社，1954年）319，335頁，またジョン・プレン「マルサスの釣り合いの原則と最適概念」久保芳和編著『スミス・マルサス研究論集』（大阪経済法科大学出版部，1996年）150頁，155頁注33も参照〕。

16）マルサスの中庸主義の想源をマルサスのキリスト教神学の教養に求める見解もある〔小林時三郎著『マルサス経済学の方法』（現代書館，1968年）52，62-4，82，207-8頁〕。

17）ボナア前掲訳書317，409頁。

18）『ケインズ全集10』137-8頁。またプレン前掲論文153頁注16も参照。なお『性格』は，マルサスが政治学や倫理学における中庸の重要性を説いていたことにも触れている〔(102頁)，またボナア前掲訳書312頁，315頁註12も参照〕。

19）ちなみにエンプソンは経済学を「文明化に関する科学」（94頁）と理解していた。

20）例えばスペングラー（Spengler，Joseph John，1902-91）が1945年に発表した「マルサスの総合人口理論（Malthus's Total Population Theory)」はこうした所説を発展させたものといえる〔南亮三郎著『人口政策』（千倉書房，1969年）80頁〕。

21）さしあたり，ボナア前掲訳書517，540頁を参照。

22）例えば，田中育久男「わが国におけるマルサス研究の動向」第20回マルサス学会大会報告（2010年７月）等を参照〔なお同報告は『マルサス学会年報』第20号（マルサス学会，2011年）に掲載される予定〕。

凡例

１．訳文中の（　）は原文にある（　）である。訳文中の〔　〕の中の字句は訳者が便宜上補足したものである。

２．原文で付されている注は（　）の中に，また訳者による訳注は〔　〕の中に，それぞれ該当する通し番号を記入し，適切な個所に配した。但し，原注に対する訳注は〔　〕の中にアルファベット（小文字）を記入した。

３．著者エンプソンが原文の中で引用している様々な著作や原資料については，可能な限り原典との比較照合に努めた。但し，邦訳があるものに関しては，便宜上原典と突き合わせたうえ，邦訳の該当頁のみを記載した。
４．挿入されている図版はすべて訳者が適宜盛り込んだものである。
５．原文にある single quotation marks は原則，「　」と処理した。
６．原文中のイタリック体で示されている語句に対しては，傍点が付してある。

第IX論文

王立学術協会会員Ｔ．Ｒ．マルサス牧師著『経済学原理，それらの実際的適用の目的を考慮して』第二版。冒頭部（pp.xiii-liv）に著者マルサスの回顧録が置かれている。八つ折り判，ロンドン刊，1836年。

マルサス氏が最初に『経済学原理』を上梓したのは1820年であった。この本は程なく絶版になった。爾来，氏はその改訂の思いを胸の内にずっと秘めてきた。今般の版は氏の没後のものであり，それゆえ幾分かは未完の著作となっている[1]。この両版を比較照合してみると，それらの内容の差異[2]は両版を隔てている歳月に足るほどのものとは思われない。確かに，最初の二章はすっかりと書き直されているし，かつ序説はまさに多様で，新鮮な材を提供している。けれども1823年に世間の関心を集めた労働に関しては，それを不変の価値尺度とする彼の仮説[3]を除けば，諸原理への変更は一切なされていない。そしてこの新命題に基づいた一連の論述は，マルサス氏の本書の全体においても最も不満が残る個所であるように思われてならない。これは，専らテーマそれ自体に因由していて，また幾分かはそれについての氏の考察方法に帰せられると言えよう。明らかに，それは十分な重要性が払われていないことや，あるいは十分な努力が注がれていないことから生じているわけではない。それゆえ学識の有無を問わず，彼の友人の誰もがその立証を寛容しよう。ともあれ何らかの不変の価値尺度が承認されてきた結果として，マルサス氏は経済学という科学の本体の根幹が揺ぐのを必至と考えたのである。彼がリカードウ（Ricardo, David, 1772-1823）氏から受け取った最後の私信[4]には，彼の1823年の小冊子への巧妙な批判が盛り込まれている。そこに記されている異見は断定的であるように思われる。マルサス氏自身は，しばしば，経済学では大抵の場合，近似（approximations）で満足せねばならないと表明していた。それゆえ

に，この場合に関しても，一般的観察による事実の一例として論じるべきである。完全な尺度を有するものはこの世に殆どないに等しい。にもかかわらず，われわれはあたかもそれを有しているかのように振舞ったり，判断したりして不都合をさらに悪化させているにすぎない。

マルサス氏とリカードウ氏は双方共に非常に親密な間柄であった[5]。両者は会談したり，文通したりしたさいには，いつも互いの相違を討論するのに専念していたように思われる。しかしそのために両氏の間の友情が損なわれるということは微塵もなかった。それどころか，さながら異なる過程を通して互いに競い合って作業を重ねている練金術であるかのように，相互の坩堝の中にそれぞれの材料を投げ入れ合って，同等の歓喜や利益を共有したのである。しかも両者の心はお互いの精神的卓越を認め合うことで，徐々に，かつ堅固に結び合わされていった。あいにく，論争中の真理の探究を本務とする二人は，互いの精神的卓越の発揮を差し控えるよりもより一層頻繁にそれを誇示したように思われる。この場で，この高名な著述家たちが論戦を交えた問題に関する議論を再説するつもりは毛頭ない。とはいえ偉大なる両者が意見をどのように異にし，またその異同をどのように伝えているか，その実例の一，二をみるのは広く有用といえよう。『経済学原理』の初版について，リカードウ氏は次のように記している。

すなわち，「高著を注意深く拝読致しました。その中には，私の全面的賛成である部分が多いということはいうまでありません。貧民の状態に関するご高論にはとくに同感で，――彼らの賃金不足に対する最も有効な救治策が彼ら自身の手中にあると幾度となく彼らに聞かせても言い過ぎることにはなりません。より良い制度の確立を妨げるあらゆる障害を一掃なさることにあなたが成功なさいますよう祈ります。……私の方が，農業改良の地主に対してもつ重要性を，当然そうすべきであったほど強く述べていないということはありうることですけれども，私はそれをけっして過小評価してはいないと信じております。あなたはそれを過大評価していらっしゃるように思われます。……資本の蓄積の影響に関する章のご意見に対し

ては私は以前と同じように異論があります。」 ── （書簡５月４日付）[6]。「あなたの本を非常な注意を払って再読していますけれども，あなたとの意見の不一致は依然として根強く残っています。あなたが私に向かって呈されています異論の幾つかは，たんに言葉上のものであって，その中に原理は含まれていません ── あなたが根本的に誤まっていると思われる大きく，かつ主要な点はセー（Say, Jean Baptiste，1767-1832）が彼の手紙の中で槍玉に上げていたものです。この点については，私は疑いを一切もちません。」 ── （９月４日付）[7]。「あなたが故意に論敵を誤伝されることのない方であると確信しておりますが，あなたの本の中には，実際に私が抱懐していない意見を私の意見だとして云々されているところが幾つか見つかります。一，二の場合には，私を誤解なさった証拠を呈示されていると思われます。というのは，あなたが私の学説をある個所ではある仕方で，また別な個所では別な仕方で表現されているからです。結局，われわれの間の意見の相違はこれらの点にかかわるものでなく，それらは極めて副次的なものであります。私はあなたの本の中で反論のある個所のすべてに，評注を付けました。そしてあなたの著作の新しい版を出版し，問題の個所にその頁の下段にある評注を参照するように符号を勝手に付けてみようかと自問自答しました。実際に，一文節の三，四語を引用し，それから頁を記し，次いで，私の注釈を付け加えました。あなたの本のうち私が最も反対するのは最後の部分です。不生産的消費者の側の需要の有効性を説くために挙げておられる理由に合理性を一片たりとも認めるわけにはいきません。彼らが再生産をしないで行なう消費が，ある国にとって，そのあらゆる可能な状況の下でどのように有益でありうるのか，卒直にいって，私には想像がつきません。」 ── （1820年11月24日付）[8]。

マルサス氏は一意専心と堅忍不抜という二つの偉大な学問的資質を完全なまでに備えていた。氏はどの問題に向き合うときも，党派心を抱くことはなかった。それゆえ彼は常に慎重に持論を形成し，かつ後日撤回することが殆どないよう自制を利かせながら表現した。けれども経済学に関して

は，誤りに対していつも以上の防衛手段を講じた。新しく，かつ広範な科学の範囲が拡大されていく気運はなかったし，門外漢の公平性を欠いた参入によって，その論争の混乱もまたその度を深まっていた。こうして氏がその研究に着手するやいなや，それは氏の生涯にわたる本分となった。彼の知力はこの一つの対象に着実に，かつ計画的に傾注された。その結果，氏は対価を手にすることになった。すなわち，アダム・スミス（Smith, Adam，1723-90）の時代以来，経済学でなされた二つの大発見 ── 人口と地代に関する発見 ── は氏の名前と同一視されている。初版の『経済学原理』の刊行以降，第二版に至るまでの間，マルサス氏は講義室や研究において明けても暮れてもその原理や詳解に検討を加えた。仮に，その間，氏の見解がほぼ不変であったとしても，それは氏には似つかわしくない自信過剰に由来するわけではない。理性が虚栄心ないしは情欲によって微動だもしなかった人などこれまでに存在しはしない。加えて，氏にとっては当たり前であった他者への思慮に対する卒直で，公正な敬意が，リカードウ氏に関しては，心からの賞賛と敬愛までに高められた。第二版に向けての準備が非常にゆっくりと進められたときの気持も，およそ，かつて初版の刊行を遅らせた[9]ときと同じ気持であった（ことは疑いの余地がない）。リカードウ氏の一通の書簡にある次の一節からその心情を窺知できよう。すなわち，「芳信の中の言い分では，あなたは私の権威に対して過分の敬意を払っていらっしゃいます。また私はあなたが仕事の完成にあまり努力をなさらなかったのをこの敬意に帰しておられるのには賛同しかねます。」[10] ── （1819年９月12日付） ── 。こうした友好的な交信はただ死去によってのみ終焉した。一見したところでは，両者は共に納得がいかないままであったかのようである。しかしマルサス氏はリカードウ氏の学問的才能や，その非常に深い思いやりをもってのけっして妥協を許さない批判の応酬から享受した利益を十分なまでに評価している。というのも，論争の形勢が不利に傾いたときにも，彼の従前の尊敬の念がそのまま意中に存在しつづけたからである。一方では，定期雑誌が次のように報じた。す

なわち，氏は終始明敏な論敵に向き合い，かつその論敵たちは彼が反ぱくするさいに従来の能力のうちにもっていたものを上回る斬新な追加的事柄を忌憚なく，しかも有益に創造してくれるのに期待を寄せていたであろうと。永別する少し前，氏は自らの遅延に非難が向けられたさい，「私見は公衆の目前にあります。たとえ何らかの変更を付加するにしろ，文言上の変更の域を超ええません。つまり私にはそれをどのように改変すれば改善できるのか不明なのです。」と答えていた。以上で，事足りよう。今回の版は文書という点に限るなら，未完の書とみなすべきであろう。しかし本著は実質的にも，学理の上でも，マルサス氏が教示する経済学の諸原理を含んでいるのである。── そして多数の人が名を馳せた時期にあって，マルサス氏は経済学の開拓の中で最も独造的で，かつ最も成功をおさめた人であり，また彼による発見の重要性は経済学の恩人という順位付けではアダム・スミスにつづく人にほかならないのである。

今度の巻に盛られた最も興味ある追加はチチェスターの主教[11]による著者の回顧録である。回顧という役目には何よりもまず慈悲深い生来の気質が求められる。その責務が主として神の教え（testimony）からのものであろうが，あるいはまた賛辞からのものであろうが，どちらにしろその責務が ── 半世紀にわたる著者の友人で，かつ優に彼の心友に足る ── キリスト教哲学者の手によって ── 現実に，この場合と同じほど適切に果されているのは稀である。

この機会がマルサス氏の学績と人柄の特性に多少なりとも立ち入る好機である。公明正大に氏を追憶するには，このことは不可欠である。一方では，節度を欠いた敵対者たちがあわただしく氏を不正確に伝えているし，また度を越した賞賛者たちがそれに負けないほど性急に氏を誤解したり，あるいは戯画化したりしてしまっている[12]。それゆえに，氏は自らが何をしているのかを知らない民衆によって慢罵され，またこのような言い訳ができない有力者たちからは目を背けられたけれども，彼自身は物静かに沈黙を貫いた。しかし氏が黄泉の国へと旅立ってしまった今日では，彼よ

りも生き長らえている友人たちにとっては，彼の心根がいかなるものであったかははしたないことであろう。この種の探究は，まさしく私的には卑しむべきだが公的には軽ずべきではないと考えられる事柄の一つである。もとよりマルサス氏を公正無私に取り扱うにあたっては，友情よりも神聖不可侵の方が，あるいは偉大な良き先人の真相を後代に伝えていくという心地のよい役目の方がより大切である。恥ずべき人のあら捜しは公衆に害を及ぼすという理由から先送りされてきている。経済学 ── 文明化に関する科学 ── は個人的中傷(1)のせいで評判を落とし気味にあり，その上最良の一人物の名前に対して不名誉な通称が付けられ，その人はイギリスの立法府が労働で身を立てている階級の独立と救済のためにかつて成立させた最も良識のある法案に対する貧民の感情を大いにあおったとされている。実際のところ，この類の問題は個々人による是非とは切り離して，それら全体の理非に関して論議されるべきである。しかしながら人性そのものはそれほど大きな理性を認めていないように思われる。経済学は心の難解さから非難されている。この科学は経済学の担当教授の人たちの内部にある性格だけを証人として出頭，召喚させているにすぎない。ジェームズ・マッキントッシュ（Mackintosh，James，1765-1832）卿が自らをアダム・スミスのことに少しだけ通じ，リカードウのことには精通していて，マルサスとは親密であった[13]と語っているのは記憶に新しい。彼は，「経済学の三人の偉大な主導者は，大略，私がこれまでに知ったうちの最良の三人であると語っても，経済学のために何の足しにもならないのか。」とも付言した。救貧法の改定案は社会の貧困者同胞に対する富裕者層の側の謀略と指弾されている。マルサスの令名，および百戦練磨のその支持者たちがこの法案の案出の元になっている諸原理に対して責めを負っているのは疑うべくもない。上記のことから，次のようなことが確認されよう。まず第一に，マルサス氏の個人的人間性に限りがあるのではなく，彼の見解によって強いられるものに際限があるのである。その結果，単なる感情が惹起させるわけではないけれども，偏見に満ちた感情が蒙昧な意識と同様にそ

の目的それ自体を挫折せんと頻々と作用しているといった事態が招来せられよう。次に，氏が1798年に一著述家として公の前に立ち現われてから没するまで，氏は筆舌でもって救貧法に関連した片言を一切表示していないので，氏を貧民の擁護者の一人と数えないことは十二分に推論できた。

1807年に公刊されウィットブレッド（Whitbread，Samuel，1758-1815）氏宛の私信の中で，マルサス氏は救貧法の一般的諸原理について，それは実際にイングランドに強制する権力を有していて，その廃止ではなく，わが国に特有の制度的改善のみを願っていると明示している（6，13頁）。さらに，次のように吐露してもいる。すなわち，漠然としてはいるけれども，自分は原則としては救貧法の一支持者である（11，27，30頁）。ある救貧法が提案されると，独立労働者の賃金はそれによって程なく平均家族を維持できる以下までに低落し，その結果依存的貧民の比率は増加し，結局彼らはいままでの状態よりも悪い状態におかれてしまうことになろう。「親しく私のことを知って下さっている人々に対しては，私は冷酷非情との誹りから私の性格を弁護する機会をもたないものと痛感している次第です。また私のことをよく知らない人々に対しては，私は，彼らが私の引けをとらないほどこの問題に打ち込まれたあかつきには，次のように確信されるであろうという所信を表明できるにすぎません。すなわち貧民の現在の愉楽と満足を減少するように思われる無二の提案であれ，もしもそれが貧民の状態の一般的で恒久的な改善によって貧民が償われてなお余りあると信じるに足る非常に確実な根拠を欠いているなら，これを認めるわけにはいかないと。私はあらん限りの強い調子で，私的で，有効，かつ差別的な慈善の道徳的義務を励行しようとしました。また仮に私が貧民の被救済の自然権を否認したとすれば，それはただ貧民の状態に関するF．M．イーデン（Eden，Frederick Marton，1766-1809）卿の有能で，苦心の研究[14]に追随して，その中の文言にある『その満足のいく行使が不可能のように思える何らの権利が存在すると断言できる否かは疑問であろう』と考えるからにすぎません。」――「実際，私は次のように考えざるをえません。

すなわち，もしその全品の全部または大半が，欠乏状況にある比較的少数の人々の救済のための公共施設を欠いている場合に，彼らの人数を絶えず増やし続けるという宿命的で，かつ避け難い結果を招来することなしに，しかも自立の境遇を維持するために奪闘しつつある人々の状態を抵下させることなしに，彼らをただ救済するにおわっていても，その金品は善用されたものであると。貧民の人数を一定に保ち，かつ独立労働者のこれ以上の低下を回避することが可能であるとするならば，現に欠乏状態にある人々こそ最も手厚く救済されるべきであるということと，彼らはそれを恩恵としてではなく権利として受け取るべきものであるということとを私はまず最初に提案するものであります。」[15]。今日なお，ポウレット・スクロウプ（Scrope, George Poulett, 1797-1876）氏のような熱弁家たち[16]が五万といて，彼らは以上のようなことを一切知らないばかりか，知ろうともしていないように思われる。にもかかわらず，一賢者の墓を踏みつけ，傲慢にも悪態をついている。

マルサス氏は1776年[17]に呱々の声を上げた。彼は才気煥発の，愛情深い父をもつという計り知れない恩沢に恵まれた。それにもまして彼はさらに幸運児であった。というのも，彼は温和で，かつ判断力に富むという天性の持主で，これらを兼備した人は優秀さという点でも，また自分が好意を寄せる人たちの短所や誤解という点でも優利であったからである。父ダニエル・マルサス（Malthus, Daniel, 1730-1800）はルソー（Rousseau, Jean Jacques, 1712-78）の親友の一人で[18]，かつその遺言執行人の一人であった。二人の友情は同好[19]を通して固く結ばれたといわれている。また二人が似通った性格を共有していた感がある。── 強靱さと脆弱さとの，ならびに良識と非常識との危険な同居といったもので，この点ではルソーの方が極立っていた。父からの一通の手紙の中の次の一節から，息子がその大部分を父に負っているに違いないものについて窺知できる。『エミール』（1762年）の最も良識に富んだ諸章の著者は，人生についてはより思慮の行き届いた考えを呈示しえてはいない。それゆえ，自分の生徒に

向かって文字言語でより愛情深い思慮分別でもって語りかけているのである。

「帰省のさいには，レンガやタイルの山を乗り越えて入ってこなければならないだろうし，また一つのベットに五人の雑魚寝とか，生垣の根元での何人かの就寝といった状況に会うに違いないだろう。しかし家族の誰もがロバートのために居場所を提供するといってくれている。……お前について耳にしている情報のすべてには大変満足している。わが愛すべき息子よ，お前が学問好きになってくれるよう，また卑しくかつ，くだらない娯楽を遠ざけるよう，そしてお前と友達になり自分はさぼろうとするような隣人の支援をあてにせず,自力本願を旨としてくれるよう常に願っている。お前の野心を抑えつけようなどとは露も考えてはいない。ただ学問がお前の幸福を脹らましてくれるであろうとの思いだけだ。あらゆる類の知識，すなわち自然と技芸に関するすべての知識はお前の心を楽しませ，強化してくれるだろう。クリケットがお前の手足を鍛えてくれていることを心から嬉しく思っている。体育にも優れてくれることを強く望んでいる。我見だが，人間というものは健脚でいるうちは快楽度の高い方からみて優に中位以上の心的諸快楽を享受しうるものだ。寝台と肘掛け椅子との生活以上の多くのものを残していないこの私こそ，かくいうに相応しいだろう。青年時代と青年の魂の歓喜を，そして向上心と健全な肉体の歓喜を一切合切長期間満喫してくれるよう祈念している ── 但し，愛すべき息子よ，とりわけ心底に美徳と至高の愛情をもちながら。」[20]

反対に，親の干渉がそれ自体いつも分別であるものとは限らないし，また同様にそうした仕方が信頼や尊敬を得ているように十分思われないのも明白である。以下の文面はかなり錯綜した親子関係を描出している。それはマルサス氏がカレッジの特待校友（fellowship）となったとき[21]に認められた書面のように思われる。その手紙が告白している感動的な回想を通して，親子の文通の中で彼の父がいかに早くから，また少しずつ息子の温厚な知性の卓越を感じ始めていたかが分かる。

「成功，心よりおめでとう。私自身が悔しい思いをしたことがあるだけにお前の成功はその分だけ余計に嬉しい。私が人生でつかみ損なったものをお前には是非とも得てもらいたいと願っている。ああ，愛すべきボブよ。怠慢のことでお前に文句をいう権利は私にはもうない。しかしお前の気分を害させた先便を書いたとき，私は自分自身の挫折や中途半端な仕事振りに重苦しい気分に陥っていた。私は自分の青年時代の記憶から，自責の念からせっかく築き上げてきたものを失おうとする私と同じ性格をお前の中に見るような思いがし，私の不運な経験を少しでもお前のために活かしたいと考えたのだ。実際，お前が私の経験談などには殆ど耳を貸さないものだから，その分かえって躍起になってそれをお前に押付けようとしてしまった。お前宛の手紙をわざといつも以上の愛情をこめて書き，ある文の調子に乗って書いた。ところがその調子に合わない返事がお前から送られてきたものだから，私は大いに落胆し，我に戻った。お前がいっているように，お前はそういう印象を払拭してくれた。そして当然のごとくお前はそうしてくれたのだ。というのも，申し分この上のない性格，好感度抜群の作法，感受性と親切心にあふれた行為，つまりお前の知っての通り，私の許しえない私の庭に小石を投げ込むようなことをけっしてせず，かつ終始変らずお前の周りにいる誰をも気休く愉快にさせる行為をお前の中に見い出してきていたのだから。仮に私が極度の気難し屋の潔癖症であるとしよう。そういう私が友人に求めるものはあるだろうか。それは完全なものでありえるだろう。気まぐれ，不合理，誤りといった要素が伴う諸願望の場合は別だが，お前の幸福がこうあって欲しいという私の願いもまた完全なものであるだろう。お前に対して愛情を拒絶するような態度に出てしまう時には，お前の手をとって泣かんばかりの気持ちになることがよくあった。そんな時是認してやりたい思いに駆られたのが事の真相だ。」[22]

ルソーの賛美者たちは，彼がこれほどの息子にこうした手紙を書ききれるほど強かであったかどうか疑問を抱くであろう。それにしてもこうした必要それ自体がなんと不面目なことか。冒し難きわれわれの天性において

一時的感情や想像に余りに優先を与える性格に対する教訓そのものである。── つまり，熱情的な感受性と思われる性格は尊厳な理性を前にしては卑小で，かつ言い訳めいたもの以外の何ものでないであろう。この場合には，その性格がうまく調節されない限り，その勢力が強大であればあるほど，心的混乱はますます増長されていく。けれども調節はひたすら均衡に向かって進んでいる。もしも不十分にしか調節されていなかった父の心中に多くの憂いがなかったとしたら，おそらくマルサス氏は不調節に気付くことなく，早いうちから上記の根本的事実に関心を向けることはなかったであろう。事実，彼は絶えず様々な方法を試行錯誤した。富の比例（proportion）への依存は彼の『経済学原理』の後編の主要な学説である。彼は微分による最大と最小の法則に似通った法則の普遍的な支配に信を置いていた。それゆえ彼は一つの注を付した（『原理』376頁），読者に想起してもらうためにいとわず引けば，「そのようにまで多くのことが比例に依存するのは，経済学においてのみではなく，自然と技芸の全範囲にわたってもそうなのである。」[23]とある。氏は他の人たちに印象づけようとした教訓を自分自身に対して忠実適用したのである。そしてそれは非常に功を奏し，おおよそ，性格は常により完璧な平衡と秩序をもったものとなったのである。

ダニエル・マルサスの奇抜さは息子の教育で力を合わせた人たちにも多少現れていたように思われる。九歳か，十歳かの年端もいかぬ生徒がケンブリッジに入学するまでに，まずはリチャード・グレイヴズ（Graves, Richard, 1715-1804）の宅で，引き続いてはウォリントン・アカデミーで，そしてギルバード・ウェイクフィールド（Wakefield, Gilbert, 1756-1801）の下で，どのような選抜原理の適用を受けていたかを推測するのは難しい。もとよりこれらの教師たちの訓導は明らかに生徒たちへの一般的支援や，通り一遍の指導に限られてはいた。氏の道徳的および知的特性の形成は現実には，より思慮深い監督下においてなされた。このより高度な部面では，彼は終始一貫して自分自身を最良の教師にしていたように思わ

れる。それゆえ，その源泉を自分を育成してくれた学校に探し求めえるという感覚は氏の心の表層にも，奥底にも一切なかった ── このことは頑固な父親，あるいは風変りな詩人についても，また感傷的な非国教徒，あるいは厚顔な論客についても同様であった。したがって普通の気質にとっては致命的であろう障害は氏の気質をむしろ強化し，完成する上で裨益したといえよう。早期のうちから自分で考え，決意するという習慣は必然的に年齢以上の堅実さをもたらしたであろう。彼はもしそうでなければ敬愛と敬意とをもって遇した人たちとは異なる宿命を幾度も背負ったけれども，かえってそのことは，誰かれなしへの親切心と厳格な個人的自尊心とが氏の性格の中でうまく融合していくのに大きく寄与した，このように確信される。こうした意図で，氏の性質は現に当初から絶妙によく混ぜ合わせられていて，快諾と名誉のうちに様々な出会いに参加したり，また離脱したりしてきたのである。グレイヴス氏が彼の無邪気な腕白振りについて家に知らせてきた逸話は，後に彼が巻き込まれた学問上の論争を最後までやり遂げえるようになった気概を写し出している。「とても穏やかな気質でありながら，そして誰かと口論するよりはむしろ自分の正当な権利すら断念するようにみえながら，ドン・ロベルト君は，逆説的に思われるかもしれませんが，喧嘩のために喧嘩するのが好きで，傷つけることに快感を覚える節があります。同君の視力はどうにか回復しましたが，同君が再び喧嘩を始めないよう算段するのに一苦労です。とはいえ同君とその喧嘩相手は無二の親友であり，共に学び，互いに相手を助け合い，私見ですけれども，本校の他のどの一組の少年たちよりも相互に馬が合っています。」[24]。これはリカードウ氏との交信 ── 心からの満足と愛情 ── への相応しい序のように読める。もしも彼がこれと同類の仕方で後の反対者たちに応じていたなら，彼らは自分たちを非難するほかないと悟ったかもしれない。

マルサス氏は大学では見ることと同じくらい真実を重んずるとの原理を生活信条とした。そのことは概して，── 一般教育を修得するやいなや一転させるというやり方で，氏の関心の範囲を様々な研究分野へ拡大させた。

既に触れたように，氏は経済学を知的専門と設定した。爾来，ときおりは別として，他のテーマについては断念した。氏は人生観や自己管理においてはまぎれもなく一功利主義者であった。この信念にそって，彼は幼年から自分を有用な人間にしてくれるような学習に取りかかっていた。ベンサム（Bentham，Jeremy，1748-1832）の信奉者との仲違いはたんに公利についての彼らの狭い概念や，人間性についての彼らのあからさまな無知に関連したものにすぎなかった。もしもそうでなければ，彼はかつて帽章に飾り立てたと同様に，教義上も，実践上も頑強な功利主義者になっていた。彼の大学在学中に，父親が彼の読書計画を立案し，誤判の介入をなそうとしたとき，氏はそれに応じて自らを見つめ直している。「私が学んだものの利用，応用を心がけずに先に進もうという気は更々ありません。それどころか，カレッジの中では私は自然界に実在するもの，あるいは実用化されうるものをよく口にする学生だとの異名を拝命しさえしています。」[25]。このように，氏は自分の学究的習慣の一特性として言及しているせんさく好きから遠ざかったわけではけっしてない。彼は理論を万能とはせず，科学は経験に基礎を置き，かつ従うとしたのである。リカードウ氏とマルサス氏とは双方ともすぐれて哲学者らしい知性の持主であった。けれども両者は主に次の点で異なった。すなわち両者は問題に向き合ったさい，実業家の方は抽象的原理の内にとどまり，かつそれを貫いた。他方，教授の方は絶えず実際的結果を問いつづけたのである。マルサスは著作に『経済学原理，それらの実際的適用の目的を考慮して』という題を付した。リカードウ氏は友人が投げかけた自分への批評に留意しながら，二人の見地に関する上記のような異同に注目を払っている。すなわち，「われわれは頻繁な議論を重ねてきたわけですから，長く意見を異にしてきた色々な問題については，あなたの議論によって私が得心させられなかったと申し上げても驚かれないでしょう。われわれの意見の相違はある点では，あなたが私の意図しているところ以上に私の本を実際的なものと考えられているに帰しえるかと存じます。私の目的は諸原理を明らかにすることでした。その

ために私は顕著な場合を想定して，それらの諸原理の作用を示そうとしたのです。」[26]と。この文面の後半はその非常に見事な思索の様子を伝えている。かつまたその中にはある種の独創的な論理が用いられているであろう。しかし考察すべき論点は依然として残されている。まずは，経済学が数学の状態にか，それとも道徳科学の状態にか，そのいずれの状態により近づこうとしているのを見極めるべきである。というのも，経済学の真理の発展に最もうまく用いられるであろう対処方法や推理方法の選択が，このことに左右されるに違いないからである。政治学や道徳学に関わるあらゆる事柄においては，極端な事例が問題全体を変えてしまう。比例に依存しているものであれば何であれ，必ずや常に程度の問題であるに違いない。

30歳のとき，マルサスは戦闘を開始する決意を固めた。彼は政治 ── 1796年の政局から取りかかった。小冊子は今なお原稿のままで，印刷に回されることはなかった。それは『危機，現体制の支持者による大英国の興味深い現状の考察』と呼称されてきた。氏の第一のねらいは自由の一使徒としてピット（Pitt, William, the Younger, 1759-1806）氏の政治に異議を申し立てることであった。氏の第二の目的は，秩序と中庸（moderation）の支持者として両極端な政党の仲裁することであった。こうした愛国心のゆえに，彼は悔やんでやまない在郷紳士（country gentlemen）の仲間の中から同盟者が出てくるとみていた。氏が推奨した方法は不満の種の除去であった。彼は一方において，「私見だが，通信協会は有益な改革案のいずれに対してもほぼ応えられないのではなかろうか。」[27]と述べ，また他端では，「あの伝統的で，崇高な性格，すなわち英国の自由の用心深い保護者の性格を1796年の在郷紳士の中に認めることはできない。」[28]と記し，次のようにつづけている。

「私のみるところでは，議論の対象を反対派から奪取するだけの数と力を兼有した社会集団の中に真のウィッグ原理が復活してこない限り，現政体を救済できるものはほかにはない。ポートランド（Portland, William Henry, 1738-1809）派はガーター勲賞，大臣職，軍事的指揮権に目をく

らませているから，この派に復活を求めても徒事であり，それを求めるくらいなら鎖につながれた囚人たちに向かって自由に行動しなさいと求める方がましであろう。それならわれわれを救済してくれる原理をどこに求めるべきであろうか。在郷紳士と社会の中流階級とが良識と理性を取り戻してくれること以外に大英国の期待の寄せ先はないのであり，もしそうなってくれれば，彼らの良識および理性が政府を動かし，現政体反対の真実性を切り崩すことによってその反対論の重圧をはね返すような安全で，かつ啓蒙的な政策を採用させるようになろう。」[30]。

仮にマルサス氏がある偏向に傾き，理性が厳密に正当化する以上に拡大解釈をなそうとしているとみなされるとするなら，それらは政治学か，あるいは経済学か，そのいずれかにおける土地利害集団と呼ばれるもの関する彼の所見であるように思われる。されば氏が1796年の郷土（squires）に何を期待していたのかが察しえよう。平和が過ぎ去った後に，彼が穀物法による得失を最大限の精密さで比較考量しようとしたとき，これらの偏向は，彼自身もが自覚しないうちに，氏の心中の均衡感覚に少しばかりの片寄りをもたらす作用を果たしたのであろう。その後も彼は，長子相続法が廃止されると，国家は一層豊かになっていくのか否かという問題に取り組んださいに，次のように書き加えざるをえなかった。

すなわち，「この種のすべての場においては，たんなる富と関連するにすぎない考慮を上回る考慮が伴うべきである。非常に長い間イギリス人を抜きん出させてきたわが国の現在の政体と自由および特権との，最初の形成とその後の保持とは，主として土地貴族の功に帰すべきであるということは，一瞬たりとも論議する余地のない歴史上の真理である。そして長子相続法によってのみ有効な状態に維持されえる貴族がいなくても，そのようにして樹立された政体が将来にわたって維持されえると結論付けることは，われわれは確かにいまだどのような経験によっても保証されていない。それならもしわれわれが英国政体に価値を認めるとすれば，もしわれわれがその理論的不完全がどのようであろうと，英国の政体が実際上歴史が記

録するいずれのものよりも，より長期にわたって，より多数の大衆に，より良い政府とより多くの自由とを与えてきていると考えるならば，この全機構を賭するような，そしてわれわれの捜し求める目的物に達する可能性が，実に恐ろしく少い実験の大海にわれわれを投げ込むような変更をあえてしようとするのはとうてい賢明ではないであろう。」[31]と。

マルサス氏は改革がもてはやされるずっと以前から改革者であった。つねに穏健で，いつも堅実であったけれども，グレイ（Grey, Charles, 2nd Earl, 1764-1845）閣下の改革を是認したのは苦渋の末のことであったと推される。この問題に関する彼の心変りの経緯は，ジェームズ・マッキントッシュ卿や，心髄より真の改革者であったその他の良心的な人々の大半のそれと一致していた。上の引用文に付された注は，マルサスが改革案を受け入れたのは何よりも期待と恐怖の感情が交錯しながらの周到な判断によっていたことを物語っている。賢者による諸手を挙げての賛意でもって付けられた付帯条件が今日では十二分に満たされるに至っているというのは，われわれ同胞の欣喜の至りであろう。

「これを書いたのは1820年のことである。その後緊急な事情のために，もし時間と事情とを自由にできるなら，思慮分別がおそらく暗示したであろうと思われるよりも，より突然で，かつ広範な性質をもった改革がなされた。しかもなされたすべてのことが，政体の実際の運用をその理論により接近させようとすることにあるということを認めなければならない。そして選挙権が主として彼らの間に拡張された社会の中流階級の大多数は，彼ら自身の利益と彼らに依存する人々の利益と幸福とが騒擾をあおり，かつ財産の安全を脅かす傾向のある処置によって極めて本質的に害されるであろうということを程なく知るに違いない。このように信じるべき確かな理由があるのである。もし彼らがこの極めて疑問の余地のない真理を十分に意識し，かつまたそれに従って行動し，かつもっともらしい上辺の理由を盾にして，不満を増長し人民を扇動している人を日常つかまえているという見苦しい汚点とその口実が除去されるなら，イギリスの政体がこれま

でよりもずっと広範で，かつより強固な基礎の上に置かれるであろうことは間違いない。」[32]。

個々の職業はそれぞれ欠陥を有している。だから様々な専門的職業は色々な道徳的危険にさらされる。マルサス氏は牧師で ── 非常に実直で，純粋な，かつ敬虔なる牧師であった。この類のことは彼の属した特権層の悪徳から完全に切り離してしまうと，理解しそこなう。この少壮の政治学者が『危機』の中で提案した救済策の中には，彼が非国教徒の人たちと交流していたからこそ主張できるようになった分別が含まれている。結果的には，彼は自己の提案した穏健な処方せんの部分的適用を目にし，かつその成功を喜べるまで長らえた。ペイリーの「宗教上の英国国教会」に関する章[33]の信条では，平和がいつアイルランドにもたらされるのであろうか。仮にマルサスやペイリーの抱懐する精神を分有せし人たちが，この50年間にわたって聖職者の階級を代表し，その中からイギリスの主教が補充されていたなら，非国教徒たちは既にイギリスの大学で粛粛と勉学に励めていたであろうし，また彼らの教会そのものも比較的平穏となっていたであろう。教会改革においては，たとえその収入がより均等に分配されたとしても，そのことは，より自由な精神がその信者の間に広く普及するのに伴ってもたらされるものと同じほど多くの純粋な善（good）といった益をけっして生み出さない。正真正銘のウィッグの主教が一，二世代つづけば，イングランド教会の一般的性質はまったく一変させられるであろう。マルサス氏は1796年に宗教的排除の政策について，書き記している。

「この種の政策がもたらす悪影響の一例はイングランドの非国教徒たちの現状に生じている。集団としてみれば，たしかに多数の個々の例外があるけれども，現在非国教徒たちは英国国教会ならびに国家に対する公然たる敵とほぼみなされている。現政体が定着した88年革命時点には，わが国が彼らから受けた支援は大きかった。そしてその時以来近時に至るまで，彼らは政体の最も堅実な使徒に属してきた。この期間に，もしも彼らに関わりのある審査令が撤廃され，かつ彼らに共同社会の他の成員と同一の権

利が与えられていたなら，現政府に対する彼らからの現在のすさまじい反対はけっしてみられなかったであろう。そしてもし普遍的な慈愛を理念とする本元の教会が教義上の些細な見解の差異を理由に分離した一群の人たちを容認するほど間口を広げていたなら，おそらくこのような行為は聖なる建物を危険にさらすどころか，英国国教会ならびに国家の力と安全とを増加していたであろうとかねてから確信してきている。彼に同じ恩恵に浴し，異宗教のゆえに分け隔てされることがなかったならば，彼ら特有の反政府感情を抱く動機もなかったであろう。そして人は宗教的，政治的信条をもって生まれてはこないのであるから，次の世代が同じ神学校で机を並べ，他の団体に無差別に混じり合っていくなら，共同社会の大きな集団の中に速やかに，かつ何の区別もされることなく吸収されていくであろう。この問題についてコートニー（Courtenay，John，1738-1816）に送られている一考察からは，氏のいつもの警句にも似たものが第一印象として感じられるけれども，それは人類の最も正しい理性と一見識とに根拠付けられている。『私としては，非国教徒たちを嫌悪する。それゆえ彼らのことをもうこれ以上耳にすることがないよう私は審査令の廃止に賛成票を投ずる。』」[34]と。

ともあれ憎悪に関していえば，マルサス氏は誰一人として憎むことはできなかった ── 公私における氏の感情の忍耐力や，氏が40年にわたって不断に受けてきた挑発を考え合わせるなら，それは誰しもが氏のことを憎悪しかねないと思える事態と同じくらい驚嘆するべきことであった。

目下の関心事はマルサス氏に代って論述したり，また証拠を提出したりするということよりもむしろ公衆の前に氏の性格に関する判断材料を提示することである。彼の未刊の小冊子から政治的な諸章句を抜粋してきたのはこうした観点からである。氏のその後の諸著作は大抵純学術書であり，それゆえ氏の本性はほかの点と同様に政治上のことについても全面的開陳を忌避した。したがっておそらくは，公衆は一般的には氏の民衆への思いやりという贈り物や，氏の政治的見解の卓越した公正無私さ（liberality）

に気づかないであろう。

マルサス氏の書誌に関して最も好奇心をそそられる『危機』の中の部分 ── すなわち，その経済学 ── は転載されないままになっている。氏はそこでの議論の中で，1796年の労働階級の貧苦や不満について詳細に立ち入り，救貧法はいかなる種類の救済をなしていて，またいかなる種類の救済をなすべきかを考察，論述している。多くの人たちがマルサス氏の学説の起源や変遷の跡を辿り直したいと願ってきた。この試論の中の一節は現存している最も初期のものであるが，氏がそのときに既に人口原理について思考し始めていたことを暗示するものを含んでいる。しかしながらこの文節の前後に配されている貧民の状態に関するあらゆる言説や，貧困を最も有効に軽減しうる手段から判断するなら，氏がまだ起点に立ったばかりであったことは明白である。この時点では，氏に先んじて人口原理に逢着した他のいずれの著者と同じように，氏もまた人口原理が含有している実際的応用という計り知れない重要性には殆ど気づいていなかったのである。氏は次のように述べている。「ペイリー大執事は人口問題について，ある国の幸福量は人々の人数によって一番良く測定されると語っておられるが，私は賛成しかねる。増加していく人口は一国家の幸福と繁栄とに関する最も確かな印ではあるけれども，現在の人口というものは過去の幸福の印でしかありえない。」[35]と。

マルサス氏の名前を不朽のものにするであろう発見は主として氏の慈悲心に負っていた。人口に関する思索は貧民の利害に対する彼の反抗心を強めたのではない。むしろ，氏がまさにこうした人々の利益のための活動に注いだ熱意と絶えざる努力こそが，何にもまして氏の関心をほかならぬこの思索に向かわせたのである。同様に，彼の見込みからすれば，下層の利益がどの程度その中に盛り込まれるかに関する自己の進歩的な確信こそが，その思索に踏み切らせたといえよう。貧民の困苦を最小限に縮小させる諸計画に関する考察は彼が当初から手がけた仕業であった。氏はそれに確固たる目的と理性的な知性とを与えた。そして人口問題の全体がそのあ

らゆる関連と重大さにおいて次第に目の前に現出してくるまで，彼はけっして思索をやめなかった。結果的に，貧困からの苦悩を最も有効に軽減するであろう手段に関する彼の見解は正反対のものとなった。氏の人間性が偏狭になったということではなく，氏の知識が広がったという結果であった。仮に人気のある熱弁家たちがいつの日か謙遜や慈愛の学び方について弁じるとしても，マルサス氏が初めてその探究に手を染め，片ぴな場所[36]で思索と探究の日々を過ごしたさい，頭の中に今日でもなおび漫している間違った意見の多数を入れていたことを知らしめる方が，人々にこうした徳目を教えるのに幾らかでも役に立とう。彼は ── 誤った知識を一掃するために，また彼の時代や地方がもたらす偏見を払拭するために ── 人々がなすのを拒絶することを実行したに違いない。このことは，概して科学の中で経済学と同じくらい第一印象が頼りにならない科学はほかにないことを再三彼に気づかせた。われわれは，氏が何度も誇りにしている二人の変革者をペイリー博士とピット氏とであると語ったことを耳にしている。けれども氏自らが開始しなければならなかったことが ── 最大の克服 ── と考えられよう。

同時代のどの書物もそれが書かれた時代に対して『人口論』に伍するほど大きな影響を及ぼすことはなかった。これもまた『人口論』の特徴である。五月雨のような人気を博する創作の滴りがまたたく間に流れとなる。今日では，その大部分ではないにしろ，多数の真理でさえ後世にとっては無価値なものとなっていく。『人口論』で示された真理の重大さは永遠不滅に違いない。この問題の探究に悪戦苦闘してきたことのある人なら誰であれ，マルサスが『人口論』でどのような状態を見出していたかを学ぶであろう。モンテスキュー（Montesquieu, Charles Louis de Secondat, Baron de la Brède, et de, 1689-1755）やジュースミルヒ（Süssmilch, Johann Peter, 1707-67）といった人たちのような才知においてでさえ，明暗が混在していて ── 一群の矛盾がみられる。著述家がマルサス氏へ関心を払うことの方が，その問題に関して呈された僅少の知識が浮遊したまま

で，その結果無益よりもさらに一層悪い状況に陥っている実質的無知よりも問題をより一層せん明にするであろう。その著述家は誰か他の著者の書よりもマルサス氏の著作からより多くの教示を得て，真実へと導かれたのである。

「私はプライス（Price，Richard，1723-91）博士の二巻本[37]で提出された事実から正に反対の結論を引き出さざるをえないことを告白する。私は人口と食物とが異なる比率で増加することに暫く前から気づいていた。そしてそれらはある種の困窮（misery）と悪徳（vice）によってのみ等しくされうるというあいまいな見解が私の心に浮かんでいた。しかしその見解を思い付いた後に行なったプライス博士の二巻の『遺族給付の考察』の吟味は，ただちにそれを確信へと引き上げたのである。制限されない場合には，人口は異常な速さで増加することを立証する非常に多くの事実を観察しながら，また一般的自然法則が過剰人口を抑制する方法さえも説明する一群の証拠を眼前にしながら，氏が私の引用した一節[(2)]をどのように書きえたのか，私にはまったく見当がつかない。氏は堕落した生活態度に対する最良の予防として早婚を熱心に勧めた。彼はゴドウィン（Godwin，William，1756-1836）氏のように両性間の情欲の消滅についての空想的な考えをもたず，またコンドルセ（Condorcet, Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, Marquis de，1743-94）氏によって示唆された方法で困難を回避することも思い付かなかった。彼は幾度となく自然の出産力にその発揮の余地を与えることを語っている。しかしこれらの考えを抱きながら，氏の理性が制限されない人口は土地が最良の方向に発揮される人間の努力によってその扶養のための食物を生産しうるよりも比べようのない速さで増加するという明白で，かつ必然的な推論を回避しえたことは，まるでユークリッド（Euclid，前４世紀－前３世紀）の最も明白な命題の一結論を否定したかのように驚くべきことに私には思われる。」[38]（1798年版）

重大な真理が円熟していく過程（degrees）や，それが最終的に無事入手される事情を振り返るのは常に興趣が尽きない。この場合には，マルサ

ス氏がその気にさせてくれる。1796年の時点では，氏は自分の方向を見出せずにいて，ピット氏の救貧法案[39]，すなわち自由，独立を宗とする法の熱烈な支持者であった。1796年から1798年の間に，（先の抄録の中で，彼が言及しているような）事実が氏に突き付けられた。それは，イングランドの人口が名誉革命以降増加してきているのか，それとも減少してきているのかをめぐってのハウレット（Howlett，John，1731-1804）との論争[40]においてプライス博士から提出された証拠であった。その当時，彼はゴドウィンの『探究者』（1797年）の中の一論説[41]が社会に提起した展望について父親とただならぬ談話を交わしていた。父の方は，予測されているように，人間の完全化という見通しに立って，胸を躍らせ，幻想を浮かべた。息子の方は，その過程での致命的な障害として人口法則と向き合った。この親子の間での激論と，真摯な論ぱくを向けられた熱狂者の一時的興奮とが，その契機となってその時代のずっと前にマルサス氏を一著述家に仕向けたのである。1798年の『人口論』は，当時彼が原理に到達していて，ほぼその域を出ていなかったことを立証している。1803年までに，彼は自分で証拠を集め，議論を整理して，人口原理と人類の幸福との恒久的関係を証明した。道徳的抑制が人口に対する一妨げとしてどの程度作用するかについて，彼は把握していたかどうかは相対的に些事である。おそらく氏は理解していなかったであろう。道徳的抑制は，氏の初版『人口論』の中でも付随的に，かつ印象的に言及されてはいる(3)けれども，正式に諸妨げの一つに数え上げられていなかった。それが可能な限り広範に作用しない限り，それは人口の圧力が人類の幸福の標準（standard）をコンドルセやゴドウィンの予想以下に引き下げるのを防ぐほどまでに遍く作用しえることはけっしてない。それゆえ道徳的抑制がその限定された議論の本体に影響を与えうるということは一切ない。しかし1803年の『人口論』は，刷新本で，かつ成熟した，しかも理解し易い著作である。したがってこの年は，マルサス氏がその発見に対して特許を受け取った年といいえよう。さて，マルサスはまず最初に自分自身に対して要望した。そのさい，氏は

当該問題を取り扱っているこれまでの著者たちに目を向け，彼らが既に何を成就しているのか ── つまり，自分に残されているなすべきものは何か ── や，他の人々のなすがままに任せるべきものは何かを指摘している。そうした人たちの名前を挙げた後に ── 。

「しかしながらなすべきことは山ほど残っている（と氏が述べている）。人口と食物との増加というおそらくはこれまでに十分に力強く，かつまた正確には述べられてはいない問題は別としても，この問題の中の最も特異で，興味ある部分のあるのはまったく未着手のままか，あるいはほんのわずか論じてあるだけである。人口が常に生活資料の水準に抑制されなければならないことは明瞭に述べてあるけれども，この水準がもたらされる様々な仕方を研究したものは依然として殆どなく，さらにこの原理がその帰結に至るまで十分に追究されたことも一切ないし，それが社会に及ぼす影響を厳密に調査すれば分かってくると思われる実際的推論をそれから引き出してもいないのである。」[42]。

以上は，マルサス氏が自らに課したものである。1806年に，次のように書き加えている。

「私の著作の主たる目的は，私が最初の六頁で確立したものと考えられるこれらの法則が社会に対していかなる影響をもたらしたのか，また今後もたらしていくと考えられるのかを探究することであった。これは容易に論じ尽くされえない問題である。私の詳論の主要な欠陥は十分に子細にわたっていないことにあるけれども，これは私の能力では手に負えない欠陥であった。既存のそれぞれの妨げが阻止している完全な増加力の正確な大きさを知るのは非常に好奇心をそそられるし，またあらゆる理性的な知性の持主にとっては極めて興味ある知識であろう。しかし現在のところ私にはどうすればこうした知識を獲得できるのか分からないのである。」[43]と。

以上が，マルサス氏が自分の後継者たちへ残している遺言である。マルサス氏はこの時点で自分の状態をしっかりと把握していたので，その議論のうちの上記の部分に関しては，30年が経過していく間も，至要な事柄を

追加したり，また変更したりすることはなかった。しかしながら氏は反論に対して寛大であるばかりか，批判に対して謝意を示しさえした。例えば，氏は時として信頼に足る読者たちに気障りと写っていた二，三の不快な表現を削除したし，サムナー（Sumner，John，Bird，1780-1862）博士が『天地創造の記録』（1816年）の中で闘争に関する宗教的な部分と格闘したさいに発揮した才能に対して常に最高の賛辞を呈した[44]。マルサス氏がこうした必要を予測しなかったとしても，許されたであろう。人類は非常に気まぐれで，かつ矛盾に満ちている。それゆえ初期の宗派の中には，人口原理に含まれている試練を自分たちの象徴とする宗教が存在していた。シェーカー教徒[45]（Shakers）はその後ずっとこの教義を守ってきている。「歳月の流れは ── 動物には生殖を負わせ ── 人間を試練にさらす ── 人は誤ちを犯し，リンゴを口するのがその特徴となる。」。われわれの本源である父と母による禁断の木の実の結末についての例の叙述を手がかりにして，ミルトン（Milton，John，1608-74）は『千年教会，すなわちキリスト教徒の連合社会に関する梗概』を研究していたかもしれない[46]。マルサス氏ははなから次のことには気づいていた。すなわち，人口と食物との比例に関連した肉体的，道徳的悪徳という特殊な事例は，悪徳の存在という漠として，不可解な問題に属しているので，他の多数の事例の場合よりもより一段とその対象についての説明方法を理解できて，はじめて他の事例と区別されると。困難が引き起こす試練のもつ広範な特性は明々白々である。にもかかわらず，いずれの個別事例においても，困難が存在する程度は明らかに個々人の管理下での事柄である。

マルサス氏が貧困の原因を分析するにあたって，その危険をかなりな程度回避する安全灯のような原理に辿りつくまでに，社会の下層の身辺をおおっている悪徳に固有な特性を発見してしまっていたとしても驚くに値しないであろう。けれどもわれわれが所持する判断材料の範囲では，これらの発見は実際にはほぼ同時に生じたのである。1803年の版の扉では，この『人口論』は，「人類の幸福に対するその過去ならびに現在の影響に関す

る一論，およびそれがもたらす諸悪徳の将来における除去もしくは緩和についてのわれわれの見通しに関する一探究」と銘打れている。このように，問題は過去，現在，および将来の三つの時期にまたがっている。それらにおける人口に対する妨げは積極的なものと予防的なものとに分けられる。困窮と悪徳とはある形態もしくは別な形態で前者を形成し，道徳的抑制は後者を形成する。これらの諸妨げの各々が過去と現在の両方において作用してきている程度については，マルサス氏の呈示している意見は明確で，経験と観察とかこれを立証するとしている。彼が同等の確信をもって将来について説き及んだというのはとうていありそうにないし，また志気を高める希望や熱心な祈りを捧げる以上のことをしていた気配もない。過去に関する限りでは，マルサス氏は徹底して独自の分類を保持していた。それによれば，その当時現実に強力に作用していたのは困窮と悪徳に限定されていて，しかも困窮と悪徳という言葉の語義は粗雑に理解されたままである。「ゴドウィン氏は私が本著の議論で既に言及し，そして本当のことをいえば，その将来における普及についてはどんな希望を抱こうとも，疑いもなく過去においては弱い力でしか作用しなかった道徳的抑制という妨げを別にして，過去において人口を生活資料の水準に抑止するのに寄与した悪徳および困窮のある形態にまったく属さないものは，指摘しえないであろうと私は信じるのである。」[47]。種々な妨げが現在の社会においてどれほどの比率で支配しているについては，それに必要な観察に苦労をいとわない人であるなら誰であれ，『人口論』の著者と同じくらい独力でもって判断できる材料を有している。われわれの全員が一定の範囲内で目撃している諸事実は現実の事柄である。1803年に，マルサス氏は近年起こってきている明瞭な改善を分類するさいに，完全な禁欲を要件とする道徳的抑制を，当事者が結婚するのを差し控えること以上のことを求めない慎慮的抑制から注意深く区別した。道徳家で，牧師である彼は，その当然の帰趨として，そのうち結婚の差し控えのみが緩和された種類の悪徳となっていくとした。慎慮的抑制にこのような説明を施したさい，氏は近代ヨーロッパ

においてこの抑制によって取って代わられてきている主要な原因が，つまりかつては悪徳と困難で表示された極めて苛酷な形態がかなりな程度目につくと考えていたのである。「家族の心配から結婚を慎重に行うことが，近代ヨーロッパにおいて人口を生活資料の水準に抑止する妨げのうちで最も強力なものである。」[48]。マルサスは議論を組立てるさい，マンデヴィル（Mandeville, Barnard de，1670-1733）を相手にしていない。それゆえ氏はこの個所で述べている悪徳の修正で道徳的に満足していたようには思われない。純然たる道徳的抑制がこれまでにいずれかの共同社会（community）の大多数の人々に普及している平均的な度合に関しては，おそらく見解がかなりわかれよう。もとより先行きを占おうとすれば，この相違はますます増大していくであろう。他のあらゆる問題についてと同様に，この問題についても，将来に関しての推測はばら色の範囲になってしまう。その範囲は誰しもがとりえ，またとりがちなものである。したがって，そのさいには，どちらかの証拠を提出したり，あるいはいずれかの側の強い関心を引く道理の可能性を提起したりすることに比べると，立言したり，また反ぱくしたりすることの方がずっと容易であろう。1803年に，マルサス氏が自分の分類の中に道徳的抑制を導入したとき，この導入によって自分は次のように期待すると述べた。すなわち，私は「正しい推理の原理を破らず，また過去の経験によって確証することのできない社会の蓋然的進歩に関する何らかの意見を表明することはなかった」[49]と。マルサス氏は，文明が現実に大衆にまで伝播していくにつれ，道徳的抑制の人口の動向に及ぼす影響がますます認識されていくようになる可能性を進んで認めた。けれども彼はとても慎重な哲学者であって，危険を冒してまで無謀な類推，もしくはたんに推測といった未知な領域に深く足を踏み入れなかった。仮にわれわれが胸を躍らせるような道案内を求めるのをやめていたなら，コンドルセーやゴドウィンの現実離れした計画はわれわれの実行できる範囲をマルサス氏に示したであろう。人間性は今日と同じままであったから，この点に関する氏の予測はけっして希望にあふれたものではなかった。そ

して曖昧模糊なものではあったけれども，彼は自分の期待をその範囲内に制限すると感じられた限界に気づき，最終的には得心しえたのである。こうして，氏は次のような力強くて，愛情深い願いと共に，その著作を公衆の判断に託したのである。

「過去の社会状態を現在の社会状態と比較しながら，振り返るとき，私はそれらの真因についてまったくほぼ無知であるという不利な状況にあってすら，人口原理から生じる悪徳は増加したというよりはむしろ減少してきていると確言しなければならない。そしてもしわれわれが，この無知は徐々に消滅していくであろうという期待をもちえるとすれば，こうした悪徳がなお一層減少していくであろうと期待するのは不合理であるようには思われない。いうまでもなく絶対的な人口の増加は引き起こるであろうけれども，これは明らかにこの期待を殆ど弱めないであろう。というのも万事は人口と食物との間の相対的比例に依存するのであり，絶対的な人口数に依存するものではないからである。本書の前編で，最少の人口を有する国が度々人口原理の影響に最も苦悩していることが分かった。そしてヨーロッパ全体をとってみれば，前世紀の方がその前の世紀よりも欠乏から生じる飢餓と疾病とがよりわずかにしか起っていないことは殆ど疑いをえない。したがって総じて，人口原理から生じる悪徳の緩和に関するわれわれの先行きの見通しは，望みえるほど明るいものではないにしろ，まったく意気消沈せしめるというものではけっしてないし，またこの問題に関するこの前のでたらめな空論が出るでは，合理的な期待の対象となっていた人類社会の漸次的で，かつ累進的な改善をけっして排除するものではないのである。人類の特質のあらゆる最も高尚な努力や，文明社会を蒙昧状態から区別するものの一切について，われわれはこれを財産と結婚についての法律や，個々人をしてその境遇を改善するための努力に駆り立てる見かけは狭い利己主義（self-love）の原理に負っている。人口原理を厳密に探究していけば，われわれはそれによってこの高さまで昇ってきた階梯をけっして放り出すわけにはいかないと結論せざるをえない。けれどもこのこと

は，われわれが同じ手段によってもっと高く昇ることができないということをけっして裏付けてはいない。社会の構成はその概観においておそらく常に不動のままであろう。それは常に所有者階級と労働者階級とから構成されているであろう信じるに足るあらゆる根拠がある。しかしその各々の境遇とそれが相互に占める比率とは，全体の調和と美とを大いに改善するように改変されえよう。自然科学の（physical）の視野が日ましに拡大し，その際限は殆ど果しなく拡大されているのに，道徳科学や政治哲学はこのような極めて狭い限界内に限定されるか，あるいはせいぜいのその影響が非常に微々たるもので，ただ一つの原因から生じている人類の幸福に対する障害をも除去しえないと考えるのは本当に憂うつなことであるであろう。」[50]と。

食物と人口と間の比例問題を取り扱うさいに，いずれの食物の不断の追加によっても必ずもたらされる他方の側の比例の改善への好影響といったような明瞭な命題について，マルサス氏がこれを見落としていたとはとうてい考えられない。むしろマルサス氏は，われわれの期待を四分の一余り高く引き上げ，利益よりもより多大な損失の惹起を回避するためには，独力による食物の増加のどれもがたとえどんなに取るに足らないものであるにしろ，貧民の境遇の恒久的な改善にははるかに強力に役立ちえると指摘する方が得策であると考えていたのである。

「ある国の食物の分量の消費者数に対する比率を引き上げようと努力するとき，われわれの関心は当然まず食料の絶対量の増加に向けられるであろう。しかし食料の絶対量を同じくらいの速さで増加させても，消費者数の増加の速さはそれを上回っていて，われわれがあらん限りの努力を払ってもやはり前と同じだけ後れをとっていることが分かれば，この方向にひたすら向けられたわれわれの努力がけっして実を結ぶことはないと確信せざるをえない。それは兎をつかまえるために亀を放つことであるように思われる。それゆえ自然の法則によって食物を人口に比例しえないものであることが分かれば，われわれの次の試みは当然人口を食物に比例させるこ

とでなければならない。もし兎を眠らせておくことができれば，亀が兎に追いつく望みは幾らかあるかもしれない。しかしながらわれわれは食料の量を増加する努力を緩めるべきではなく，もう一つの努力をそれと結び合わせるべきなのである。つまり人口が一度追いつかれたときには，これをある距離だけ後らせ，われわれが望む相対的比率を達成できるように保持するのである。このようにして大なる現実の人口と，貧困と依存とが比較的に見られない社会状態という二大不可欠物を結合すべきである。この二つの目的はけっして両立しえないものではない。」[51]。

以上は，こうした均衡が実際的目的のためにはどのようであれば最善と考えられるかについての1803年時点のマルサス氏の所見である。氏の経済学の新版にある次の章句をみれば，氏がこれを変更する機会を殆ど見出せなかったことを知得できよう。

「生活の必需品および便宜品に対する大きな支配は，二つの方法によって，すなわち労働を維持するのに予定された基金の分量と価値との急速な増大によってか，あるいは労働階級の慎慮的抑制によって実現せられるであろうということと，彼らの境遇を改善するかつての方法は貧民が自らこれを実行する能力もなく，また事の性質上恒久的でもありえないので，労働階級の幸福のための大きな資源は，もし正当に行使されたならば，社会の最初の段階から最後の段階に至るまで生活の必需品および便宜品の正当な部分を彼らに確保させうる慎慮的習慣になければならないことを常に銘記しておくことが最も大切である。」[52] —— （260頁）。

マルサス氏は一時的手段について幾許か考えたほどにはその心を恒久的手段のことに奪われていなかったのは明らかである。彼は，それらが一時的なものにほかならないことをわれわれに分からせようと，また仮にわれわれがそれらの大半を実現したとしても，それ以上のことをなしえないということを理解させようと願っていたにすぎない。氏自身，理論的著述家たちが活況と不況との合間を見過しがちであると不平を鳴らしているのである。すなわち彼は，一再なく反復される八年または十年が人間生活にと

っては重要な間隔であると解しているのである。だから誰一人として時折の不況のさいの一時凌ぎの救済を声高く主張しはしなかったのである。また同時に，こうした見方が一般的原理と思慮深く，かつまた運良く連結されるなら，こうした救済手段だけではなく，文明化がその各々の段階でもたらす様々な機会によってもある永続的な善（good）の達成をなしうるであろう。社会の進歩的な前進期 ── 封建的財産制の解体 ── 労働の維持基金の大増加 ── における最大の空白や，疾病をいやし，人命の浪費を減少させる救治法の発見はどちらも露と消失してしまう有利さであるにすぎない。万事は，これらの新しい状況の下で人々の身に起こっている変化のいかん次第なのである。移民は一方の側で労働供給の超過を流出するであろうし，また貿易制限の撤廃は他方においては労働市場を拡大するであろう。けれどももしも下層がその愉楽の標準を引き上げ，それを維持する機会を逸するならば，たとえその標準が彼らの人口の慎慮ある調節（regulation）によって一旦は引き上げられたとしても，その余光は一世代で失われるであろう。一時的な支援として望ましい方策は多々ありはする。その幾つかは，慎慮的習慣が形成され，作用する余地をもたらす手段として不可欠なものである。それにもかかわらず，慎慮的および道徳的習慣に関しての，また事これらだけに限っての，絶え間なく差し迫ってくる脅威に対する特別の救済策は，その方策によって同時に刺激を受けた人口原理が社会の脅威となって跳ね返ってくるということと関連しているというのもまた真実なのである。

真実はそれがまさに真実であるときでさえ，ゆっくりとしか広まらない。おそらく誰しもマルサス氏の著名な『人口論』に比べれば，よく話題に上る書物 ── 正確には，これまでに何らかの影響を及ぼした書物の一切に目を通していたし，またしばしば理解してもいた。彼が解明すべき問題は，様々な国々における食物と人口との間の現在の比例がどのような方法によって規制されたかである。マルサス氏は経済学者の意を満たすのに足る説明を呈示している。しかしながら依然として数多の，喧噪な反対者たちが

いる。何人かの反対者はそれを理解できないまま，愚純の域を越えている。これらの人たちのうちで，グレアム（Graham, James，?1791-1861）氏は超越した位置を占めた。また別な人たちは感情的，ないしは宗教的憎悪から『人口論』に耳を貸さないであろう。例えば，サウジー（Southey, Robert，1774-1843）博士，コールリッジ氏，およびハンティングフォード（Huntingford, George, Issac，1748-1832）主教である。われわれが少年であった頃，ハンティングフォード主教は大胆不敵な議論を「生めよ，殖えよ」という聖書からの一句で終えるのを習わしとしていた。経験により神の教えを全否定する人たちもいる。ウェイランド（Weyland, John, 1774-1854）氏がそうであった。さらには，この現象の自然的解決を説くというよりは，むしろあらゆる局面から神の意志という特殊な介在を排除する人たちもいる。ゴドウィン氏やサドラー（Sadler, Michael Thomas, 1780-1835）はこの部類に属した。二人はプライス博士やミュレ（Muret, Jean-Louis，1715-96）氏といった現実離れした先行者に追随し，人類に関する随意の生殖力の法則 ── 場合に応じて変化していく ── を想定した。別な方面から参集してきているのではあるけれども，アンダーソン（Anderson, James，1739-1808）氏，オーウェン（Owen, Robert，1771-1858），およびポウレット・スクロウプ氏といった力量を備えた賢人たちも二人と同じ範ちゅうにある。こうした主義者たちも実行不可能な法則を求めて，自分たちの気まぐれな想念の充満する宝庫へと足を運んでいく。唯一の相違点は，その追い求めている新しい法則が人類の出産力に関するものでなく，人類の食物の増加を決定付ける諸条件についてであるという点である。彼らの統計的情報にしたがえば，人口が食物の限界以内に抑止されていたのではなく，食物が人口の水準にまで増やされてこなかったということになり，今後もずっとそうであろうということになる。上に列挙した反対者たちの中に，マルサス氏は天然痘，ペスト，奴隷貿易の味方であり，しかもあらゆる種類の困窮と悪徳の支持者であるといまだに主張しつづけている論客を見出しても，何ら不思議ではない。氏は貧民の利益と

いう視点を失っていて，富ばかりを直視していると罵倒されている。けれども次のように論じているのはまさに氏にほかならない。すなわち，「もしある国が低賃金を求める競争に勝つことだけで富裕になりえるならば，私はただちにそんな富は死滅しろといいたい気持になるであろう。」[53]と。氏は道徳的原因を過少評価していると難じられているけれども，次のように明記しているのである。すなわち，「諸動因の物理的性質にも，道徳的性質にも言及することなしに，それに基づいて行動がなされる材料の物理的性質から結論を引き出すことは経済学においてどんなに危険であろうか。」[54]と。彼が結婚に関して不埒で，愚弄した所見を抱いたのは彼自身のせいにされている。しかし実際上，いままでに結婚の望ましさを高尚であるとした人など一人もいない。なんとなれば，彼の立論では，結婚は事実上有徳に対するほう賞としてなされ，また愉楽と独立のうちに保持されるよう努力されて，結婚生活は純潔で気品のあるものに維持されるよう願望されていたからである。（氏は論述した），すなわち，「結婚は常にその実際のままに，つまり人間の性質にとくに適合し，幸福を増進し悪徳への誘惑を除去するのに大いに有益であると説明されるべきである。しかし財産やその他の望ましい目的物と同様に，結婚の利益は一定の条件においてのみ到達されるものであることを示すべきである。」[55]と。男性は結婚をなす余裕がない限り，馬車の世話をする資格がないと同様に妻の世話をなす資格をもっていない。マルサス氏の非の打ちどころがない生涯は，矢を突き刺すことができず，また中傷誹謗を断ちうる盾を氏に与えた。彼は少しもちゅうちょせず，かつ脇道へそれることもなく，また瞬時たりとも誤用に注意をとられなかったように思われる。『人口論』を層一層重要なものにすることの方が，冷静沈着な実直さや温和といった氏の性質を動揺させていたであろう。とはいえ彼は自己主張をなさざるをえなかったさいには，ウェイランド氏に対して明言できる。またひいてはそのことを介して多数の『人口論』の誤用者たちに確言できる理性的および道徳的資格を有していると自認していた。「私はウェイランド氏に劣らず道徳と宗教とが

社会の幸福に及ぼす影響を重視しようとするものである。しかし確かに私は一家を維持する合理的な見込みのない場合における早婚への傾斜の抑制を道徳的義務の中に含めている。そしてこの種の徳の高い（virtuous）克己が道徳に含まれない限り，私はウェイランド氏とはまったく意見を異にし，彼の命題を明らかに否定し，いかなる程度の宗教や道徳も，いかなる程度の理性的な自由や身体および財産の保障も，現在の自然法則の下においては，社会の下層階級を愉楽で豊かな状態に置きえないものであるといわざるをえない。」[56]と。

以上のように，『人口論』は読まれるよりずっと多く容かいされてきた。このことは，その反対者や賛美者を問わずほぼ同じ状況であったと推される。読むのが当たり前と思っている人たちは『人口論』に十分精通していた。シーニア（Senior, Nassau William，1790-1864）氏は間違いなくそのうちの一人であった。シーニア氏は，人口に関する二講義を付けたマルサス氏宛ての書簡[57]の中で，この問題について奇異な説明を行なっている。すなわち，その講義の中でマルサス氏の「傾向」という用法を用いて，マルサス氏の所見について説明するさいに誤解に導いてしまったと記述している。「私は主として，ご高著の公刊以降に人口について著述してきた人たちの手引きによってこうした誤りに陥ったと思っています。あなたに追随してきた多数の人たちと，あなたとの論争に挑んできた少数の人たちとがこれがご高見であるかのようにすっかりと思い込んできました。また話をあなたのご労作に戻しましても，私見によれば，生存手段に対する人口の圧力が社会の最も野蛮な状態において最も苛烈で，そこでは人口は極めて稀薄であり，またそう用いられていると思われる生存資料を獲得する手段がその人口に比例して最大であるというのはあなたの一貫したご所見とはいかにも相容れません。」[58]と。またシーニア氏は，別な個所で次のように述べている。すなわち，「マルサス氏の卓見は彼の長く，輝しい哲学者としての生涯の経過の中でかなり修正されてきたように思われる。」[59]と。この主張に対して，われわれは既に論述してきた程度のもの以上の証

拠を見つけ出しえない。マルサス氏は1803年の四つ折版をたんに名目上だけの第二版と考えていた。氏がその序文で述べているように，それは実質的に新版 ── （ピット氏の貧民法に関する僅かな言及にとどまらず,）はじめて原理の公共的諸施策への適用を行なったもの ── はじめてその問題を詳細に考察したもの，そしてそれゆえはじめて実名を名乗るのに相応しいと思ったもの ── であった。マルサス氏が加えた変更を確認していく作業ほどの大仕事はほかにはない。第三版（1806年）の序文で，氏は変更をなした個々の章の大半を列記している。シーニア氏は次のように論をつづけている。「しかしもしかく乱する原因がなければ，生存資料は人口よりもより急速に増加していくであろうという正反対の学説がシーニア氏によって彼の前に呈示されたとしても，彼はこれを拒否したように思われる。われわれは彼の以前の文言ではなく，それらの言説が導く推論について云々しようとしています。」[60]と。われわれはそれに目を通したけれども，マルサス氏の手紙はその著作の中に散在するどの文言や推論をも否定するものではない，それどころかむしろそれらすべての再確認であるかのように推察される。氏は，人口の不断の圧力が自著の原理の本質であると繰り返している。したがってこの圧力は社会のあらゆる段階に影響を及ぼすに違いない。未開の社会と進歩した社会との唯一の異同は，作用している妨げの特徴にある ── それは,前者の場合では残虐な類の困窮と悪徳であり，後者の場合は緩和された困窮や，より人間的でかつ上品な性格という徳の高い習慣を伴った道徳的抑制である。それゆえ依然として今なお抑圧するという傾向だけではなく，絶対的な圧力も現存しているであろう。その圧力が今日では昔日ほどには目につかず，また激烈なものでもない ── これこそが唯一の相違にほかならないのである。文明化がさらに進んでいくと，幾つか国々においては，その圧力はイングランドの現状ほどには苛烈にならないであろうし，また不道徳な類ないしは猛烈な類にもならないであろう。しかし人間性がなおも不変である限り，どんなに漠としていようと，こうした方向で期待される有利さは無限ではないのである。この事例にお

ける失敗例は数限りなくつづいていくに違いない。だから人口は結局のところ依然として「専ら悪徳および困窮によって制限」されるであろうし，またこの結果，「人類集団の恒久的福利」という見地からなされる推論は，依然として，地上の誰しもが愉楽な生活資料を十分に支配できるといういずれの計画に一致させるよりもずっと意義深いままであろうと理解される。管見の限りでは，マルサス氏は撤回するつもりはなかったし，この書簡のやりとりでかつて公表した意見の一片を取り下げたと理解されるとは思いも寄らなかった。氏は私信の中で，シーニア氏が代用するよう提案した用語よりも自分自身の言葉や語義の方を選択すると述べている[61]。暫くして，シーニア氏との議論に触れたさい，氏は次のように論評している。すなわちシーニア講師はこのやりとりの中で何か新たなことに言及するよう私に時折求めたけれども，そこには何ら新味がなく，その結果，公開講義に損失を与えたと。もしもマルサス氏が自分の用いた術語に放たれた反論の妥当性に得心していたなら，彼は一瞬もためらうことなくそれを放てきしていたであろう。氏は身にふりかかった危険を十二分に察知していたのである。この結末として，氏は1817年の『人口論』で追加した付録の中で次のように付記している。「おそらく私は弓を一方に曲げすぎたことに気づいたので，これを真直にするためにこれをもう一方に曲げすぎたのであろう。しかし本書の中に十分な審判により弓が最終的に真直になるのを妨げる傾向をもっていると考えられる部分があるならば，いつでもこれを消し去りたいと思っている。」[62]と。想定されている歪みは極微であるので，かなり丹念に探求してもそれに気づくことはできないままである。真実の友人であるなら，弓が常に一律に慎重である手中に預けられていて，心配する必要は一切ない。

シーニア氏は経済学に関する最も明晰で，思慮分別のある解説者の一人である。彼は，マルサス氏が名誉ある位置を占めている科学になした貢献に対して賞賛の辞を呈して，この小さな論争に終止符を打っている。

「マルサス氏は初期の著作においては時折発見者に通有な誇張に陥って

いると思われる。けれどもたとえこうした誤びゅうを犯していたにせよ，人類の恩人として，彼をアダム・スミスに比肩すべき地位に置く実際的結論には影響しない。仮にいま人類の幸福または困窮が主として人口あるいは生存資料の相対的な増加に左右されるということと，かく乱する原因が存在していて，しかもその原因が人間の制御内にあって，その増加を規制しえるということとが認められているとするなら，かく乱する原因がない場合には，生存資料と人口とのいずれがより急速に増加する傾向にあるかは大した問題ではない。これらはマルサス氏が事実と推論で確立した命題である。それらは長く根をおろしてきた偏見に異を唱え，またあらゆる種類の詭弁や罵声を浴びながらも，今日では，大多数の理論家はもとより，さらにはそれらの意見をう呑みにする人々の大部分によっても承認されている。」[63]。

『人口論』の功績についてのリカードウ氏の評価はその書簡のうちの一通に鮮烈に示されている通りである。ここで初版とされているのは明らかに1803年の版である。

「私の持っている高著は初版で，それを拝読して以来多年が経過しました。……高著に対して私の保持している一般的印象はすぐれたものです。諸学説が非常に明確にまた十二分に説明してあるようで，私がそそられた興味はわずかにアダム・スミスの高名な著書によって呼び起こされた興味に届かないにすぎません。以前にお話ししたと記憶しており，またあなたもその後の諸版で訂正したいといっていらっしゃったと信じますが，あなたはある個所で，救貧税は分配されるべき食物の量を増加する上でまったく効果ももっていないかのように論じておられたと思っています ── あなたは救貧法がそれの需要を，したがってそれの供給を増加させることをお認めになる義務があると思いました。これを承認されても，けっして立証されるべき主要点を弱めることはありません。」[64]（1816年１月）。

五版が出版されたとき，リカードウ氏は次のように書き送った。

「ご労作に対して予定していたすべての検討を加えたわけではありませ

んが，その補足的な事柄については手紙を差し上げたと思っていました。旅行中にそれを拝読させていただき，われわれの相違の陰影を目にしたところではどの頁にも目をこらし，帰宅してから改めてそれらの文章に目を通し最善の考察を試みることができるようにしておきました。……ご高著はいまここにありますが，補足された事柄を全部読み返してみて，手際よく探しても異論をはさむ余地が殆ど発見できないので驚いています。あらゆる部分において，あなたは極めて明確であり，すべての人の心に確信を与えるにはただ時間が必要なだけです。」[65]（1817年10月）。

マルサス氏の『地代論』は名人芸のなせる所産で，それはリカードウ氏が平素最大級の賛辞で語っていた著作である。先行する著述家たちは，例えばアンダーソン博士が『蜜蜂』誌[66]で正しい原理に関してなした近時の手引きはその価値を保っている。同時期に現われた晩年のウェスト（West，Edward，1782-1828）による出版物[67]は独自的なものであり，この著作の示す到達点によってのみ，この問題に関する科学がどの出来事，または誰の勤勉でもってその発見を主要な人物のうちの誰の手に帰するかを決着できるであろう。第５版『人口論』の実質は『経済学原理』に転移されている。マルサス氏の他の瑣末な著作についてはこうした事態はない。それらを集合させれば，非常に興味ある一揃いをなそう。いずれかの書肆がこのことを理解してくれるよう希うばかりである。それらは明確な推論，広範な視野，そして何よりも無比の公正をもった卓越した規範となる。著作一覧は『回顧録』の42〔－３〕頁に掲載されている[68]。『王立学術協会会報』に発表された二論文[69]がそれに追加されるであろう。それに本誌に掲載された数本の論文と，経済学の新学派をアダム・スミス学派およびマルサス氏と区分する主要な相違点に関する『クオータリー・レビュー』誌に収録された一論文[70]がある。氏はこの最後の論文を自分がこれまでで経済学においてなしえた最良の一つと考えていた。

ウミツバメがそうであるといわれているように，マルサス氏も周囲を慮って嵐を好まなかった。けれども彼の諸小冊子の刊行日時や性質に目をや

ると，結局のところ，彼はいつも嵐のさ中にいたということが分かろう。これらにさらされたとき，役立つに機会であるということが十分な刺激となり，彼の活力は機会ある度に高まったのである。若き日のあふれんばかりの騎士道的精神が歳月の経過と共に平静で，礼儀正しい勇気へと落ち着いていった。このことは読者諸賢が日頃確信されているところである。またそれは氏の純粋な志や，氏の大義という善性に寄せられた正当な信頼にその根拠を置いてのことであった。「彼はまったく不義を経験しなかったので，危険を恐れなかった。」。1800年に刊行された彼の『現在の食料高価の原因についての一研究』は好調な滑り出しであった。不足に比例しての価格の極端な高値の真因についての無知は，不足が必要とした救済措置と同様に公共の平和を不穏なものにしていた。暴徒や治安判事から保護される中間商人や穀物問屋を目撃したり，あらゆる階級の無知な人々に対して自分本位の情欲による危険な結果に注意を向けるよう警告しているのを目にしたりするのは，若い牧師にとっては奇異に写った。彼はパン条例[71]の撤廃を推奨し，人々に向かって，「高等法院長に率いられ，大陪審員たちの指図によって全国一円に推し進められた怒号は，思慮深いすべての人たちにわれわれの市場の将来の供給を心配させずにはおかない。」[72]と主張したのである。

趣が多少異なっているけれども，別の実例は穀物条例の影響に関する1814年，ならびに1815年の彼の小冊子である。氏はそのさいに説いた一連の議論によって自分の評判が広がってしまう恐れを十分覚悟していた。彼はそれまでに公表したものがその声価を大きく下げたのではないことをよく了知していた。概して，（氏のお気に入りの「要約すれば」）でも，当時の氏は平生口にしてきた賢実な判断と同じほどの確信を抱いてはいなかったのである。氏は，真実と公正な言動の同志たちが地主に対して論陣を張ったというごう慢な個人的中傷と共に，一方的なやり方のために相当な反感を買ったとずっと思っていた。氏は，扇動的な熱弁が冷静な議論と合体すべきであることを ── 問題をめぐっての両陣営の側の意見に忍耐強く傾

聴し，常軌を逸した期待を逐一白日の下にさらすべきであることを極めて有益であるとみていた。荷上げするさい一定の火酒を要求する不埒な関税がある。氏は，その監視を大衆に任せていることが ── 穀物法の撤廃や，同じ性格の方策のいずれの廃止によってもおそらく取り払うことのできない類の一つであると感じていた。氏はこの使命を遂行したことを一切後悔しなかった。けれども自由貿易に加担する彼の一般的原理はあまりにも撤底されていたので，時として，いずれかが例外として認められるべきなのかという疑問が氏に襲いかかってきた。その当然の成行きとして，氏は，自らが論じた穀物輸入の制限のための個別的例外の必要が十分に達成されなかったと不満を抱くのが常であった。ある個人の利害が何であるかを知るだけで良いと思っている人たちが，その個人の意見がどのようなものであるのかを正確無比に推論するには，マルサス氏がリカードウ氏の，また自らの抱いていた穀物法や地代に関する学説に関連して，個人的利害についてどう論じていたかに注視することが有益である。「地代の大きな受領者であるリカードウ氏[73]が地代の国民的重要性を極めて過小評価しており，そしてかつて地代を受取ったこともなく，また受取ろうと期待もしない私が，地代の重要性を過大評価しているとおそらく非難されるであろうということは幾分奇妙なことである。これらの事情の下におけるわれわれの異なる意見は，少くともわれわれの相互の誠実さを示すのに役立つであろうし，またわれわれが樹立した学説においてわれわれの精神がどのような偏見にとらえられていようとも，その偏見がそれにとらえられないように警戒することがおそらく困難で，地位や利害に気づかない偏見ではなかったという有力な推定の根拠を与えるであろう。」[74]。

人間についての一般的不信感はともすれば個人的不正を招来するにやまず ── しばしば公共的奉仕にも害を与えるに違いない。一般的疑念に代えて評判についての情報を用いるのは杜さんな管理方法である。二つの事件に当って，マルサス氏はその経済学担当教授として任用されていた東インド・カレッジに向けられた非難に対して出版物[75]で反論した。リカード

ウ氏はかつて，ダグラス・キネード（Kinnaird, Douglas James William, 1788-1830）が取締役会の席上でカレッジについて発言したさい，ほぼ礼儀を欠いたままマルサス氏の労作や証言を扱ってしまっていると忠告した。キネード氏の方は，マルサス氏が利害関係をもった証人であると述べれば，十分な返答になると思っていた。ともあれ，イギリス国民がインド人民のために介入しうる唯一の有益な方法は，イギリス国内で文官の道徳的および知的資質をあたう限り保証することである。つまり，かの遠方の帝国の実質的な統治者であるためには，イングランドから定期的に送り込まれる若者たちの能力を引き上げ，それを請け合うことである。公平無私の答弁の可能性についても，似通った疑念が広く蔓延しているように思われる。もしもそうでないなら，この重要な文官統治を改善する最善案が一再ならず議論されているのに，この点に関して東インド・カレッジがどれだけのことをしてきたのかを ── つまり，カレッジが今日までそれ以上のことをしてこなかったかを， ── そしてカレッジがなしえるものは何であるかを，イギリス国民に実際に語りえる無二の人たちの発言に殆ど耳を貸さないといったことなどありえないであろう。こうした普遍的懐疑主義の原理は，昨今真理と理性に関して絶えず関与している。例えば，マルサス氏が支持していない党派の人を除けば，アイルランドの在郷紳士は皆一様に自分の評判を気にして，アイルランド救貧法に関する自説を立てないままでいる。この原理をさらにもう少し拡張するなら，本当に適切な知識が殆ど万事にわたって排除されることになろう。アイルランド人なら全員，アイルランドに対しても，またアイルランドに関しても閉口でいなければならないのである。その挙句の果てには，感覚または有徳に関する場合であれば，常に愚者とならず者とだけがその唯一の証人として傍聴席を独占する羽目になろう。

マルサス氏の著書に対するリカードウ氏の幾つかについては，往復書簡を使って既述した。このやりとりは，どちらにとっても栄誉あるものである。リカードウ氏は一度ならず，公衆は二人の討論の恩恵に浴すであろう

という思いを吐露している。二人が啓発する討論を重ねていたかどうかは疑わしい ── 二人が人を楽しませるような形式でやりえなかったのは間違いないけれども。

「われわれの異なった見解を公衆にはっきりと提示することができ，それによって幾人かの優秀な頭脳にこの問題の考察に従ってもらうことが可能となるなら，私は非常に嬉しいでしょう。」[76]（1816年10月），「ご自分で端を切られた討論をつづけないためのあなたの言訳は巧みなものです。私はそれに満足すべきでしょう。それは私に対する結構な賛辞をともなっていますから ── これほど変わることなくあなたの論敵となってきた者に対してよく呈していただけた誠に結構な賛辞です。しかしながら私はあなたに同意致します。 ── われわれはお互いの意見に精通していますから，私的な討論によってはお互いのためになり合うことはあまりなさそうです。 ── もしあなたほど精妙な筆を操ることができたなら，われわれは公の討論によって多少なりとも公衆のためになりえたであろうと思います。」[77] ── （1821年11月）。

リカードウ氏は友人が両者の相違を引き出そうとしているのを大いに喜んでいた。意見が一致すると，彼はその功に得意満面であったのである。

「近日出版なさる目的で執筆にご多忙と伺って同慶です。公衆はあなたの筆になるものは何でも大いに歓迎して注意を払います。それゆえもしあなたがこれまでにとくに時間をかけ反省を重ねてこられた問題について至るところに存在する無知と偏見との雲をこの風潮を利用して除去しようと努められないならば，社会に対するあなたの義務は果たされないことになります。」[78] ── （1815年１月13日），「われわれは経済学の邪魔となっている幾つかの困難や矛盾の是非をあなたに期待する権利を有しています。」[79] ── （1815年５月）。

次のように，批評がその反論の中に純真な誠実さを含んでいるのは珍しい。

「私見への言及に関しては，ご自分の思い通りになさらなければいけま

せん。私見が間違っているなら反論して望しいと思いますが，それらは本質的な点ではすべて正しい原理に基づいていると考えますので別に寛大な処置を求めません。それらがどんなに激しい攻撃を受けることがあっても，私は意に介しません。それらについてあなたがなんといわれようと，それが侮蔑を表わすものでない限り私が感情を害するはずはありませんが，あなたが私に対してそれを抱いておられないことは承知しております。ですから，私に対しては未知の人としてお振舞い下さい。そして私に言及なさるなり，なさらないなり，最良と思われる通りにして下さい。」〔80〕――（1815年３月），「私のものこそ正しい信条だと申しますとき，私は正しいという強い信念を表現しているだけで，この表現を不遜と受け取って下さらないように願います。あなたに向かっては私見を強く主張してしまう癖が私にあり，またあなたもきっと私が他のやり方をすることは希望なさらないだろうと思います。あなたのやり方にしたがってあなたが同じことをなさることに私は満足しており，納得しないままにたんなる権威に向かって譲歩するつもりは私と同様にお持ちでないという卑見にはあなたも同意して下さるだろうとあえて申しておきます。」〔81〕――（1820年10月）。

まさしく，偉人とは何とも繊細な愛情と自負心との持主であることか。上述したように，リカードウ氏の確信は心底からの謙遜に彩られている。次のように，彼はマルサス氏が初版の『経済学原理』の中で自分に送ってくれた賛辞に対して謝意を述べている。

すなわち，「あなたが注の一つの中で私に与えて下さった賛辞は大変過分に存じます。私をよく評価して下さっていることを知って嬉しく思います。でもあれはあなたの親切なえこひいきがあなたを盲目にしているのだと，私と同様に世間も考えるのではないかと思います。」〔82〕――（1820年５月４日）と。

われわれの確信していることに関連した一節が，リカードウ氏が他界する前にマルサス氏に宛てた最後の手紙の末尾にあり，この注目すべき往復書簡に対する至当な結末となっている。

「マルサス学兄これで私の仕事は済みました。他の論争者たちと同じように多くの討論を重ねた後われわれはそれぞれ自分の意見を維持しています。しかしこれらの討論はけっしてわれわれの友情に影響を及ぼすものではありません。私はたとえあなたが私見に同意して下さっていたとしても，あなたに対して今以上の好意をもちはしないでありましょう。」[83] ――（1823年８月31日）。

この思いやり深く，かつ殆ど予言的ともいえる永別の後に，マルサス氏が怒りにも似た表情を示した唯一の瞬間は，二人の間柄へのねたみを表示したり，あるいはそれを評判として示そうとしたりする試みに言及したときに限られるけれども，このことは驚くべきことではない。

マルサス氏は，「私は自分の家族以外で，これほど愛した人は誰もいなかった。われわれの意見の交換は極めて隔意のないものであり，われわれ二人が研究していた対象は真理以外の何ものでもなかったから，われわれの見解は早晩一致したに違いないと考えざるをえない。」[84]と付え加えたのである。

世間の人々は経済学者としてのマルサス氏については知っているが，氏のその他の側面については無知である。氏は人間生活のあらゆる方面においてもすぐれた判定者であった。それは，その都度最も楽天的な観点から万事をみようとする氏の気質によるところが大きかった。氏の個人的見解は陰うつなものと呼ばれてきた。しかし氏自身は持説をそうであるとは思っていなかったし，またそうだとも自覚していなかった。氏の人間に関する一般的観察の結果は，非常に楽天的な道徳家と考えられてきているペイリー[85]のそれと比べても優るとも劣らないものであった。ペイリーはこうした人生観であったがゆえに，非常に邪険にされ，かつ抑圧を受けながら立身したので，『自然神学』（1802年）の中では先行きの見通しを除いて，神の慈悲心の事例を論じなかった。反対にマルサスの見方では，人生は「一般的にいえば，将来の状態とは別な祝福」で，その部分的苦痛は「秤の埃」であり，そして（彼は論じている），「われわれは強力な過程におけ

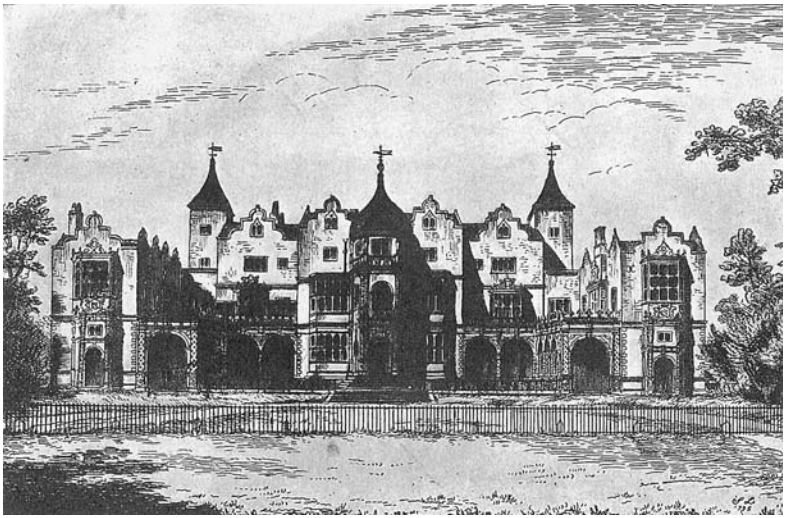
る諸要素の一つとして絶対に必要なもの以上に，世界には害悪はないと信ずべき理由をすべてもっているのである。」[86]と。この世で作用している強力な過程の明確な目的に関する彼の見解は，人類の大多数にとっては無用な類のものであった。またこの見解は彼の私的な友人の幾人かにとっても納得がいかないものであったので，氏はこれを運否天賦に任せ，コンドルセーやゴドウィンの衰微していく理論への反論と共に削除した。しかしこれは，氏が人生の問題を哲学的に解決するさいにしばしば用いたものであり，同様にまた氏が絶えず出していく解答の原則を包摂してもいる。

「世界は精神の創造と形成とのための強力な過程であると考えるのは，われわれの周囲の自然現象，人間生活の様々なでき事，および人間に対する神の継続的な啓示と等しく一致することが見出される思想である。この大きな溶鉱炉から，必然的に歪んだ形の多くの器が出てくるであろう。これらのものは無用物として壊され，投げ捨てられるであろう。他方その形が真実，優雅および愛らしさに満ちている器は，全能の創造者の面前に近いより幸福な場所に運ばれるであろう。」[87]

しかしマルサス氏は ── 社会の法律を制定することはできなかったけれども ── われわれが時折出会うたんなる机上の哲学者ではなかった。家庭にあっては，賢明な判断を下したり，毅然として注意を与えたり，あるいはまた首尾一貫して言動したりすることができていた。氏は自分自身のことや，諸事万般についてどの程度が適当であるのか，あるいはまた自分にとってはどの適当であるのか，あるいはまた自分にとってはどの程度が望ましいのかを理解していた。もしも氏が自らの基準から人間を判断していたならば，氏はいつも誤認として排した仮説を ── すなわち，あらゆる人々が真の利益を見つけ出すのに不可欠な聡明さや，それをしっかりと保持していくのに必要な人格上の強靱さに恵まれているという仮説を，真実として受け入れていたに違いない。以上のような能力は，マルサス氏本人の場合にはまったくといっていいほど天性のものであるから，それは常時そうであったのか，それとも氏が克服しなければならない困難の類であっ

たのかを究明したいという思いに幾度となく駆られた。マルサス学派はまったく形成されなかった。過去の営為による思想を提示するのを制限するものは一切ない。偽物の徳ないしは皮相の評判といった粗末な支柱や外堡にほかならない学者ぶった支配も寸毫もない。氏においては，百事は理解し易く，分かり易い。氏は，この世での勝利者が自分の幸福の源泉に到着するのを懸念しはしなかったけれども，金銭や地位のもつ有利さについてはある程度感知していた。また他方において，彼は，そこに到達し，不利の方が優勢になり始める変わり目がたちまちのうちに生じても，守銭奴でもなく浪費家でもない多数の人たちが依然として殆どそれに察知しないでいるということにも気づいていた。愛情や悟性といった愉悦がおびただしく，かつ途切れることなく，しかも長期にわたって氏に注ぎ込まれていた。それゆえ彼は，きっと，これらの愉悦を奪い去り，またそのさいにまばゆいばかりの約束を取り消してしまうであろう自分の地位の何らかの変化に気をもみながら身守っていたことであろう。また以上のような経緯の中には，マルサス氏がそれ相応に顔色を伺っていた人事考課者たちによってあれこれと申し立てられる筋合は何もない。それは考課者たちがマルサス氏の時代における第一級の経済学者たちの欲求，願望，および要望のいかなるやを尋ね歩いた道筋には存していなかった。「マルサス氏だけが彼らの鑑識眼から逃れた」といわれるさい，われわれがこれまでに耳にしている主教のうちどのお方がその例外となるのか。偉人や政治家についてみれば，リヴァプール（Liverpool, Robert Bank Jenkinson，1770-1829）卿が経済学者であり，牧師である人物に嫌悪感を抱いていた。そうではあるけれども，経済学に関する知識は，その公務を通して公的慈善を分配する極めて平凡な人たちや，貧民教育の任にある人たちにとって必要なのか，それともそれ以上に地上で暮らしている人々のうちのどういった階級に必要とされているのかを識別しなければならないのである。ランズダウン[88]（Lansdown, Henry Petty-Fitzmaurice，1780-1863）卿やホランド[89]（Holland, Henry Richard Vassall Fox，1773-1840）卿〔図２を参照〕が

図２　ホランド・ハウス



（出典）Sanders, Lloyd, *The Holland House Circle*（New York：Benjamin Blom, Inc.，1969）の front page より。

自らの力で万事を成就したのは間違いない。けれどもこの事実は非常に頭を悩まらせる。マルサス氏はある小さな僧職[90]を除いて，英国国教会においてさしたる地位を占めていなかったので，昇天した70歳のマルサス氏は高潔に発揮してきた大きな能力に落胆し，また自分の分野における悪評に無頓着になっていた。リンネル（Linnell, John，1792-1882）が描いた見事な氏の肖像画[91]を幾度も思い浮かべても，それは彼の穏やかな表情に反しているわけではないが，「恩知らずの祖国」を想起させる。マルサス氏の要望と同じような要望に関して事実上後回しにされた類の権利について調べるとき，キリスト教徒の身にふりかかっている運命や，聖職者の大聖堂で占める席および不平等な暮し向きが学問上の功績に対する報酬としてずっと維持されなければと主張しつづけるといった厚顔無恥は，どのように解すべきであろうか。聖職授与権（patronage）の乱用は大聖堂の参事会を壊滅させてきている。もしもこうした事態がつづくなら，参事会

は教会の財産の分与において残存している不平等の改善を急いで行なわなければならない。この種の乱用は人々がその気配を予知しえる害悪である。したがってそれは英国国教会に早過ぎる終末をもたらす特殊な種類の害悪である。ペイリーは50年前に教会の財産に関して一つの問題を投げかけた。すなわち，「私はこうした事柄の取り扱いにあたっている人たちに次のような問いを提起する。その貧弱化しつつある基金の最良の分け前を放蕩者や大家族をもった無学の若者への年金に振り向けて，残されている牧師へのわずかな薄謝を枯渇，消滅させないように威喝するのか否か。」[92]（『道徳哲学』）と，ペイリーは問いかけたのである。どんな返答が返されたか。無視であった。イングランド国教会は牧師の価値に冷淡であるのか，それとも神のご利益が人間の仕業で消し去られたり，その息の根を止めさせられたりするはずがないと高を括っているのかのいずれかであると想像される。そうでもなければ，神のご利益でもって，サットン家（Suttons），トムリン家（Tomlines），スパーク家（Sparks），およびフィッシャー家（Fishers）がこの半世紀を生き長らえることなどけっして期待できなかったであろう。ともあれ，マルサス氏の私事について，怒りあるいは悲憤のいずれのためというよりもはるかに公衆のために語っているのである。氏にとっては，「神や最高存在は手段ではなく目的であった。」のである。乱用に鈍感で，また無視には気づいてはいなかったけれども，氏は賛美には極めて過敏に反応した。氏は賛美について他の何よりも自分の感涙を誘うものと語っていた。公衆の感謝の念の何らかの表出や，政治的信条をまさに同じくする国会議員からの個人的賛同ほど，氏の心を打ったものは殆どなかった。たとえ改定救貧法が現況の下においてさえ実行していくのが困難であろう[93]とも ── もしもマルサス氏が極めて多年にわたって論ぱくと汚名の猛攻に耐えながら，危険を恐れず，かつまた真実以外のどんな利益にも目をくれずに，その矢面に立っていなかったならば，その成立は絶対に不可能であったであろう。

マルサス氏の能力と資質とはたんに調和しているにとどまらず，相互に

支え合っているように思われる。その調和は非の打ちどころがなく，それらを切り離して思い設けてはいけない。また氏の道徳的性質と知的性質は結合され，連動して，発展したので，それらのどちらかの実態そのものと想像してもならない。それらは共に独自性を有していた。両方の強さは等しくそこにおけるそれぞれの部分の絶妙な比例に左右された。両方において，知覚できないけれども抵抗し難い制御が作用していて，それはあらゆるものを適所に配置し，全体に一貫性と統一性を与えていた。その結果として，全体としては，それを構成する個々の部分の精査から予想されるであろう効果を上回る効果を生み出したのである。大抵の場合では，その存在は知力の消耗や，あるいは道徳的努力の衰弱や猛進に消尽されてしまうけれども，氏は常に自分自身を支配し，制御していた。氏の人性に関する法則はかく乱諸原因から解放されて，進歩的経過を辿ったのである。こうして穏やかさや人を引きつける冷静沈着さは氏のすべての行動に行き渡り，また氏の心底にまで浸透して，氏の生活を目を奪れるほど美麗である清澄な流水を写し出す鏡にしたのである。しかし不案内の人が以上のような秩序ある配列の卓越を十分に理解するには，その人がこの事に精通する必要がある。その人には全体として理解し，把捉する時間が不可欠である。というのも，完全な比例の最も重要な一効果は見かけの大きさを減少させるということ，そしてまたある程度の嗜好と経験はそれらのもつ有利さの性質と範囲を理解されねばならないこと，これらのことが事建物の内部だけに限ったことではないからである。このような仕方で，マルサス氏は自分自身の内部で反対の性質を結合，融合させたのである。彼は，堅苦しくはないが公正で，また気弱ではないが柔和で，そして面白味のある潔白な人であった。大きな長所が大きな短所によってすっかり相殺されてしまうことはなかった。もしも氏が多少の細瑕をも持ち合わせていなかったなら，おそらく，これほど多大な長所をもちえなかったように思われる。したがって，たとえきらびやかな外観がこのようにして生じてきたのだとわけなく想像されたとしても，それでもやはり修正が多分全体の比例を乱し，そ

の結果それをより柔弱で，不完全なものにしてしまうであろう。

しかしながら事は以上に尽きない。マルサスの最高の性格である頭と心という資質は正確を期するなら，注目すべきというよりも魅惑的というべきものであった。それは華々しく現出したものではないし，また一朝一夕に外観上の泡のように生じたものでもない。でもその性質はとても静穏で，深遠であったので，皮相な観察者はこのことを見過ごしてしまうであろう。氏は群を抜いて，聡明であり，かつ善良であったのである。ところで聡明さや善良さは一目で判断できる事柄ではない。人々が晩さん会の席で，あるいはまた経済学クラブの場で[94]，氏の友人の中に投げ込まれ，ある失望感を抱いてその場を後にしたことがあるだろうことは難なく理解できる。どの有名人 ── その評判の具合がどんなであろうとも ── の口からであろうと，外食を常としている人に次から次へと機知に富んだ言葉を求めるのは，わが国出身の紳士と淑女に限られてはいない。マルサス氏はひけらかすのに要するあらゆる条件を欠いていたので，ボズウェル（Boswell, James，1740-95）のような人は氏と同席していたなら，徒に時間を費したことであろう。氏については，バーク（Burke，Edmond）のほとばしりは一切なかった[95]。氏は，テンプル・バー〔図３を参照〕の下で一緒に五分間の通り雨の通過を待った友人であれ，驚かせることはけっしてなかった。可能であったにせよ，氏は話好きで評判であったジョンソン（Johnson, Samuel，1709-84）をもてはやすような粗野に向き合う性質を極度にもっていなかったのである。マルサス氏が，出会いがあった友人を競争相手とみなし，攻撃したり，非難の的にしたり，ついには駆逐したりするということはなかった。反対に，氏は自分を友人に合わせて，誰かれなしにくつろがさせたりすることの方が務めで，喜びであると感じていた。氏は突発した不調和な類似を慮外に置くといった好み，あるいは才能を一切もっていなかった。氏は，真実や（それが原因と結果に関連して限りでの）すべて有用な知識に基づいた原則と密接に結合させて，極めて単純な一連の思考を辿っていくのに抜きん出ていた。その思慮分別で名を馳せて

図３　ロンドン・シティの西側の入口であったテンプル・バー（1666年のロンドン大火の後に建てられ，1878年まで存続した）

（出典）松村昌家著『幕末維新使節団のイギリス王還記』（柏書房，2008年）138頁より。

いる大抵の人たちの明朗さに負けないほどの氏の明朗さは，機知というよりはむしろ茶目という観を呈していた。学校やカレッジにおいて氏を特徴づけていた茶目は徐々に自分でおどけるというよりも他の人たちに喜んでもらうことに収束していった。1798年の氏の初期の評論の中には，新鮮な文体，およびタッカー（Tucker，Abraham，1705-74）からの様々な暗示や陽気が含まれていた[96]。氏が立論を公衆に提示したさい，一部の比喩的な言い回しが後に氏に返されるという不誠実なやり方がなされ，そのため氏は将来に対してのみに限定せざるをえなかった。氏はこの種の綱渡りをすることにともなう危険を教えられたのである。氏の後期（later）の著作の科学的な色合いや，また氏がそれらに間違いなく傾注した思索も同等の効能を強くもたらしたに違いない。それゆえ晩年の作品は非常に思慮分別に富みかつ育ちが良い好人物という視点に立てば，たんにこの種の色彩を示しているだけかもしれない。でなければ，こうしたことはけっしてありえなかったことである。というのも，マルサス氏はいかなる時も，いかなる状況の下でも，足の爪先から頭の天辺に至るまで，完全な紳士であったからである。もとより読者の方々の視界においては，氏の人性の広大

さや美しさの実相は ── 来る日も来る日も氏と向き合うことで ── 次第次第に明らかになっていった。現に，氏の趣味や習慣は非常に素朴で飾り気のないものであったから，機会があるなら，読者はその身を氏の秀逸さの発見に預けられて良い。そうなさったとき，その発見は楽しみの極みとなろう。

マルサス氏は次のような大きな長所も兼有していた ── すなわち，氏の悟性がいかなるものであるにしろ，氏は常にそれを最大限に発揮したのである。その様子はありのままの姿であり，それを変容させる向きも，またそれを変える兆しも全然なかった。氏の判断の公正さがまったくかき乱されなかったわけではない。それはいつも決って氏の目的の公正さによって規正された。よもやまの問題の相対的な重要性について判断を下すさい，氏はそれらが人類の幸福を促進するのか，それとも妨害するのか，そのいずれの傾向を有しているのかを唯一の基準とした。氏がある時にたまたま取り組んでいた特定の問題に臨んださい，氏は真実の発見以外に何がありうるのかがまったく理解できなかった。こうした二つの性格が重なり合って，氏にはあらゆる個人的関係において，それがどんなに重要なものであろうと，またどんなに些細なものであろうと，常に一様で，また厳格なまでに公平で，かつかなり寛大であった。以上，氏が厳格に試みた公平の感覚に触れた。氏はわが道を見つけると，瞬時もためらわなかった。氏は，いわば羽根の上に乗って舞い上がり，より清澄な地方へと舵を切った。この余裕は実際上気高いものであった。氏は名声にけっして無頓着ではなかった。しかし氏の真実への執着はせい絶なものがあり，それゆえ勝利を求めて論ずることなど肉体的にできなかったように思われる。氏は自分の哲学者としての貢献をまるで意識しなかったわけではなかった。けれども氏が哲学的研究から得た十分な達成感の中には，私心はつゆも入っていなかった。正義が支配しているということだけで，公正であったとする人たちには殆ど無関心であった。さらに議論を進めて，仮に氏の人口の理論が覆されたとしても，残念無念という感覚の一切は，人間が真実にとって有利

な見解に向かってしっかりとした新たな一歩を踏み出したという穏やかな歓喜のうちに忘失されてきたことを確認しておこう。今般の『回顧録』の中で述べられているように，氏の優秀さへの愛好は他人より上回りたいという愛好とはまったく別物である。このことのどれ程が，氏の教育を導いた指導法において競争という動機が稀薄であったという史実に帰されえるかを云々するのは難しい。個人的優秀さについての自意識が氏の習慣や，あるいは物腰に表出したことは一度もないし，また一切ない。いつも比較的に鷹揚で，伸び伸びしているのはよく整った性質という一つの天恵である。氏は一方において哲学的思索に極度に没頭していたけれども，軽妙な足取りと穏やかな表情ですぐさま自分の研究から客間へと移って，周囲に陽気や活気を振りまくことができた。これらを楽しく使い分けて，氏は日々を最高の休日として過ごした。けれども晩年には，このように楽しむために特別に取っておいた日があったようで，その日には氏の最も古くからの友人である二人，すなわちウィンショー[97]（Whishaw，John，1764-1840）とスミス[98]（Smyth，William，1769-1849）とが定期的に訪ねてきた。氏はヨーロッパ中で賞揚された時期には高齢に達していたけれども，氏をわがカレッジの大きな栄誉としていたヘリベリの東インド・カレッジで瑣末な日常的職務を模範的な几帳面さで遂行しつづけた。氏は自分の声価を盾にして甘えたりすることはなかった。つまり氏は自分の地位や高年齢を口実にして何かを免除されようと目論んだりしなかったのである。氏の思慮分別と温雅，および氏の威信と魅力は氏を羨望の的にした。それは公共団体の成員がかなうなら氏と共に行動したいと常に願うほどであった。また氏自身による厳格でかつ温厚な諸徳目の給合は類稀で，かつ完璧であったので，同じく氏は人々からの賞賛と愛の的となっていた。

チチェスターの主教は社会的および家庭的にみた氏の性格について，実際次のように述べている。すなわち，「マルサス氏を親しく知っている人々やマルサス氏の性格の鑑定人としてはやはり第一人者である人々によって無茶苦茶だと考えられるような言葉をもってそれについて語ることは困

難である。」と。さらに付言して，「彼の気質は非常に温和で落ち着いたものであったし，他の人々に対する彼の配慮は非常に大きくまた非常に著しかったし，彼の願望はとても節度があり，また彼は自分自身の感情を実に完全に制御したのであったから，ほぼ50年間にわたって彼を親しく知っているこの論説の筆者は，いまだかつて彼がむしゃくしゃしていたり，怒っていたり，有頂点になっていたり，あるいは意気消沈していたりするのを殆ど見たことがない。」[99]（『回顧録』49頁）と。これまで述べてきたことに限れば，以上の点に関して幸運にも理解できているというほかない。つまりわれわれの立証が真実であると理解する。氏の温和で慈悲深い振舞いが何度もわれわれの目に飛び込んでくる。神は，われわれが心像のための意識の部屋の中でこの非常に柔和な姿容を思い出す恩恵を喪失するのをお許しにならない。今日もなお，氏の友情を正しく振り返りえたとしても，── 氏が最高の評価を与えたもの ── 飾り気のない純然たる真実という氏の賛辞の一言を上回りはしないという思いはきっと覆られないであろう。氏のすべてを完全に理解したとするなら，氏はわれわれがこれまでに知りえた最良の人物となり，また本当の真の哲学者となろう。氏がその徳に対する栄誉を授与されるまで，生き長らえなかったことは，氏との永訣にあたってのせめてもの慰めである。もしもそれを一顧するなら，われわれは自ら，バーネット（Burnet，Gilbert，1643-1715）主教がレイトン（Leighton，Robert，1612-84）自身についてや，あるいはまたレイトンとの間で頻繁に交わした自由な会話について回想しているものを再説するほかありません。すなわち，「私が彼の中に見出した規範，そして私が彼と交わしたかの会話について，私は神にどんなにお返ししなければならないか分かっています。」と。

原　注

(1) 独立で，あるいはまたコールリッジ（Coleridge, Samuel Taylor，1772-1834）氏のお陰で稼ぎを得ているコールリッジ氏の著作に関する遺言執行人たち[a]は，彼の亡くなった後も，マルサス氏への反抗に有害なまでにとりつかれた[b]出版物を流通させて，一体何を期待しているのか。彼と知り合いであったすべての人にとって，ある人間に対する反抗が私生活のあらゆる義務の忠実な遂行というのには仰天させられる。彼らのうちの誰であれ，氏が少なくとも良き夫で，良き父であったと話しても聞く耳をもっていない。またどのような権限に基づいて，こうした無礼な本作りが継続されているのか。想像と耽溺のとりことなったあわれな人たちの中の一人の権限がキリスト教の寛容を最大限にまで拡大している。そのさいこれらの人たちはある義務と向き合うのを恐れて，また結局はわずかばかりの比較対照をなすことさえしないままに，自分たちの生活や習慣を恥知らずのうちに実行したのである。「マルサス主義。マルサスの途方もない実用的な詭弁が現在わが国の指導者にすっかりと浸透してしまっているのは ── まったく驚くべきことではないが ── 嘆かわしいことである。このようなまったくの虚言が道徳上に存在している ── 事実上，このような実用的妄言があまりにも多く存在していることか。私は厳かに宣言する。私はかつて人間の無知と愚鈍と邪悪とが生み出したいかなる異端，分派，徒等といえども，総じてこのいまわしい説教ほど，キリスト教徒，哲学者，政治家または市民としての人間の恥辱であったとは考えない，と。」── （88頁），「現在の，またはマルサスの経済学の一色に染まった風潮は国民性を奪い去ってしまう。」（『食卓談話（1835年）』327頁），「最後に，その支配者たちや賢人たちが ── ペイリーや ── マルサスごときに傾聴しているこの大国民を見よ。憂うつな，いかにも憂うつなことではないか。」（『Ｓ．Ｔ．コールリッジ文筆遺稿集（全４巻，1836-9年』328頁）。コールリッジからの引用例[c]は総力を挙げて，ある問題に関する氏の高見の価値を無効にする方向に傾けられている。コールリッジの大半の文芸批評やシェイクスピア（Shakespeare，William，1564-1616）への全面的な心酔は賞揚できるのに，残念なことである。

(2) この一節は，仮にわれわれがただ単にその国で暮らし，自然的寿命に到達するならば，疾病は消滅し，死はさながら睡眠のように除々なる衰弱によって迫ってくるという見解の表明を暗示している。プライス博士は人類の本来の出産力

が文明化と共に減少していくと確信していた。ゴドウィン氏の方は，人類が一組の男女から始まったかどうかについては，語りえないけれども，諸般の事情から，人類が一組の男女で終焉を告げるのは非常にありそうであると考えていた。

(3) この書に索引がないので，読者諸氏は217-276頁を参照されたい〔マルサス著永井義雄訳『人口論』（中央公論社，1973年）131-62頁〕。

訳　注

〔1〕第二版『経済学原理』の編者は，近年の考証では，カゼノウブ（Cazenove, John-1788-1879）とされている〔出雲雅志「もうひとりの『異端者』ジョン・カゼノウヴ」中矢・柳田編『マルサス派の経済学者たち』（日本経済評論社，2000年）56頁，73頁注17〕。

〔2〕さしあたり，拙論「マルサス著『経済学原理』の両版の一比較」『長崎県立大学論集』第34巻第１号（長崎県立大学学術研究会，2000年）を参照。

〔3〕『価値尺度論』（1823年）における労働の価値不変性に関しては，入江奨「マルサスの真実価値論と価値尺度論との関係についての賞書」〔久保芳和博士退職記念出版物刊行委員会編『上ヶ原三十七年』（創元社，1988年）所収〕や，中矢俊博著『ケンブリッジ経済学研究』（同文舘，1997年）第６章を参照。

〔4〕リカードウの1823年８月31日付のマルサス宛手紙〔中野正監訳『リカードウ全集IX』（雄松堂書店，1975年）422-5頁〕。

〔5〕二人の交友はシャープ（Sharp, Richard，1759-1835）の仲介で，1811年６月頃に始まった〔大野忠男訳『ケインズ全集10』（東洋経済新報社，1980年）129頁，および奥田聡「フランシス・ホーナーの金融思想の形成と展開」飯田・出雲・柳田編『マルサスと同時代人たち』（日本経済評論社，2006年）213頁〕。

〔6〕1820年，リカードウのマルサス宛手紙〔中野正監訳『リカードウ全集Ⅷ』（雄松堂書店，1974年）207-8頁〕。

〔7〕1820年，リカードウのマルサス宛手紙〔『リカードウ全集Ⅷ』257頁〕。

〔8〕1820年，リカードウのマルサス宛手紙〔『リカードウ全集Ⅷ』339頁〕。

〔9〕マルサスが1819年９月10日付でリカードウに宛てた書面などを根拠にして，マルサスは18年11月頃には初版『経済学原理』の草稿を完成させてはいたけれども，その後もなおその公刊にはためらっていたと推察されている〔拙訳「マル

サスの『経済学原理』の本文概要」『長崎県立大学論集』第33巻第４号（長崎県立大学学術研究会，2000年）96頁〕。

〔10〕『リカードウ全集Ⅷ』84頁。

〔11〕オッター（Otter，William，1768-1840）のこと。オッターは1796年以来のマルサスの学友で，99年の５月20日から11月上旬にわたってマルサスと共に北欧旅行をなした。またオッターはマルサスの遺稿を整理したり，マルサスの墓碑銘を起草したりした。ちなみにマルサスの一人息子のヘンリー（Malthus，Henry，1801-82）は，1836年にオッター師の長女ソフィア（Otter，Sophia）と結婚し，後にチチェスターの主教となった〔南亮三郎著『マルサス評伝』（千倉書房，1966年）28，41，55，58頁〕。

〔12〕こうした概況については，さしあたり伊藤久秋著『マルサス人口論の研究』（丸善，1928年）223-42，249-91，297-302，314-69頁を参照。

〔13〕マルサスは1815年３月にはウィッグ派のマッキントッシュと知合いになり，彼をリカードウに紹介した。またマッキントッシュは1818年１月に一般政治とイングランド法を担当する教授として東インド・カレッジに就任し，マルサスの同僚となった〔飯田ほか編『マルサスと同時代人たち』103-4頁，252-3頁注53〕。

〔14〕総頁数が2,000頁にものぼる大部な３巻本，『貧民の状態』（1797年）の概要については，吉尾清著『社会保障の原点を求めて』（関西学院大学出版会，2008年）の第３章，第４章を参照。イーデンは，おおよそ，救貧法の適用対象の極小化を説き，自助や強制によらない慈善の拡大を主張していた〔同書166，177頁〕。

〔15〕小林時三郎訳「マルサスの『救貧法の改正にかんするフイットブレット宛の書簡』〔小林著『マルサスの経済理論』（現代書館，1971年）所収〕206-8頁。

〔16〕スクロウプは困窮者の被救済権を主張し，労働可能貧民に仕事を給し，大家族を養うに足る賃金を取得させるような救貧を説いた〔森下宏美著『マルサス人口論争と「改革の時代」』（日本経済評論社，2001年）134-5，140，146頁〕。

〔17〕正確には，1766年２月13日（木）〔南『マルサス評伝』11-2頁〕。

〔18〕「ダニエル・マルサスはヒューム（Hume，David，1711-76）の友人であったばかりでなく，ルソーの熱烈なとまではいかなくとも，心からの賛美者であった」〔大野訳『ケインズ全集10』100頁〕。ダニエルとルソーは少くとも３度，会見したとされている。まず，ダニエルが1764年の春にムティエ（Moûtiers）

にまで足を運びルソーを訪ねた。次には，ルソーがヒュームと連れ立って，66年の３月９日（日）の午後に，生後24日目の乳児のマルサスがいたサリー州のドーキングの山鴉荘（the Rookery）を訪ねた。そして３度目は，ダニエルが同年の６月にルソーが寄寓していたダービー州のピーク山のウットン（Wooton）に出向いた〔同上訳書99-102頁〕。

〔19〕両人は共に植物学に興味を寄せていた。1770年に，ルソーはその圧葉標本の一部と植物学に関連する自分の全文庫をダニエルに売却，譲渡した。またダニエルは30ギニーを払って，ルソーの遺稿『わが生涯の悲惨の慰め』を六部予約したりもした〔『ケインズ全集10』102-4頁〕。

〔20〕ダニエルの1787年６月16日付のマルサス宛手紙〔橋本比登志著『マルサス研究序説』（嵯峨野書院，1987年）336-7頁〕。

〔21〕1793年６月10日のこと〔南『マルサス評伝』26頁〕。

〔22〕ダニエルが1787年11月頃にマルサスに宛てた手紙〔橋本『マルサス研究序説』338-9頁〕。

〔23〕Ｔ．Ｒ．マルサス著依光良馨訳『経済学原理（下）』（春秋社，1954年）218頁注１。

〔24〕グレイヴズの1779年８月10日付のダニエル宛手紙〔橋本『マルサス研究序説』391頁〕。

〔25〕マルサスの1786年２月11日付のダニエル宛手紙〔橋本同上書327頁〕。

〔26〕リカードウの1820年５月４日付のマルサス宛手紙〔『リカードウ全集Ⅷ』207頁〕

〔27〕マルサスの未刊行の『危機』より〔橋本『マルサス研究序説』367頁〕。

〔28〕『危機』より〔橋本同上書367頁〕。

〔29〕ポートランド派は自由主義的改革に慎重な立場をとったウイッグの一陣営で，例えば1792年12月には革命主義者のフランスからイギリスへの入国を禁じた「外国人法案」を支持したりした。95年７月には，ピット大連立内閣に合流し，五つの大臣の席を占めた〔中澤信彦著『イギリス保守主義の政治経済学』（ミネルヴァ書房，2009年）124，127頁〕。

〔30〕『危機』より〔橋本前掲書367頁〕。

〔31〕依光訳『経済学原理（下）』222-3頁。

〔32〕同上訳書223頁註。

〔33〕William Paley, *The Principles of Moral Political Philosophy*（1785），in Poxton,

James, ed., *The Works of William Paley, D. D.,* Vol. II（London：Thomas Tegg, 1845), pp.442-70〔その概要については，大村照夫著『ウィリアム・ペイリーの政治哲学』（晃洋書房，1996年）139-45頁を参照〕。

〔34〕『危機』より〔橋本前掲書368-9頁〕。

〔35〕『危機』より〔橋本同上書367頁〕。

〔36〕マルサスはケンブリッジを卒業した翌年の1789年に，ジーザス・カレッジの特別研究員になる（６月10日）一方で，サリー州のウォットン教区にあるオークウッド（Okewood）の小さな教会に年俸40ポンドの牧師補として就任し，農村暮らしの日々を過ごしていた〔ジョン・プレン著溝川喜一・橋本比登志編訳『マルサスを語る』（ミネルヴァ書房，1994年）12頁〕。

〔37〕ちなみにマルサスが利用した『遺族給付の考察』は第４版（1783年）であったと考証されている〔永井義雄著『自由と調和を求めて』（ミネルヴァ書房，2000年）69-70頁〕。

〔38〕マルサス著永井義雄訳『人口論』（中央公論社，1973年）194-5頁。

〔39〕ピットはウィットブレッドが1795年の冬に提案した最低賃金法案（96年２月12日に否決される）に反対し，居住制限法の改定，雇用や賃金補助による救済，友愛組合の奨励，および勤労学校の創設を主張した〔小山路男著『西洋社会事業史論』（光生館，1978年）98-9頁〕。

〔40〕この論争については，さしあたり深見保則「最低賃金裁定法案と政治算術」『経済学史研究』第47巻第２号（経済学史学会，2005年）80-1頁を参照。

〔41〕第二部第二章の「貪欲（Avarice）と浪費（Profusion）」を指す〔永井訳『人口論』13頁，およびW．ゴドウィン著片岡徳雄・住岡英毅・山根祥雄訳『探究者』（黎明書房，1977年）118-27頁を参照〕。

〔42〕第２版『人口論』の序文より〔吉田秀夫訳『各版対照マルサス人口論Ⅰ』（春秋社，1948年）56頁〕。

〔43〕第３版『人口論』の付録より〔吉田秀夫訳『各版対照マルサス人口論Ⅳ』（春秋社，1949年）222-3頁注〕。

〔44〕マルサスは第５版『人口論』（1817年）の中で，「この問題は最近サムナー氏の著書『天地創造の記録』で鮮やかに追究されている。私は，本書では示唆するにとどめるしかなかった見解を見事に展開し，完成させているこの書に言及できて嬉しく思う」と吐露している〔吉田訳『各版対照人口論Ⅳ』289頁，また

吉田訳『各版対照人口論Ⅲ』（春秋社，1949年）82頁注１も参照〕。なお『人口論』と『天地創造の記録』との比較検討は，柳沢哲哉「Ｊ．Ｂ．サムナーとマルサス」中矢・柳田『マルサス派の経済学者たち』所収においてなされている。

〔45〕アン・リー（Ann Lee）がキリストの再来を信じ興した宗派で，女性である自分こそその再来であるとした。彼女と信徒は1774年にイングランドから北米植民地に渡り，1776年にニューヨーク州のウォーターヴリート（Watervliet）で共同社会をつくった。信者数は南北戦争（1861-5年）前の６千人が最大で，財産の共同所有，男女平等，独身主義などを教義とした〔松村赳・富田虎男編著『英米史辞典』（研究社，2000年）680頁〕。

〔46〕1640年代から50年代にかけて，ダニエル書やヨハネ黙示録20章に基づいてキリストが再臨し，千年間この世を統治するという千年王国論がイングランド全土を席巻していた。この説では，その到来の前に反キリスト（Antichrist）を倒さねばならず，チャールズ一世や監督制の下にある大主教らがその標的とされた。1639年７月にイタリアから帰国したミルトンもこの千年王国論を確信するに至り，以後終生「消極的至福千年訳信者」であったと解されている〔永岡薫・今関恒夫編『イギリス革命におけるミルトンとバニアン』（御茶の水書房，1991年）35-6，79-80頁〕。ミルトンがキリスト再来に言及しているのは，1644年までの著作で，例えば『教会統治の自由』（1642年）などである〔同上書81，132頁〕。ちなみにミルトンはヨーマン，職人，中小商人等といった the industrious sort of people もしくは「中間層」をコモンウェルスを支える基盤として高く評価し，「勤労と徳」の重要性を説いていた〔同書255-6，313，321頁〕。

〔47〕『人口論』第２版から第４版までの各版中の文章〔吉田訳『各版対照人口論Ⅲ』91頁〕。

〔48〕第２版『人口論』中の文言〔吉田秀夫訳『各版対照人口論Ⅱ』（春秋社，1949年），321頁〕。

〔49〕第２版『人口論』の序文より〔吉田訳『各版対照人口論Ⅰ』58頁〕。

〔50〕『人口論』の第２版以降の後続諸版にある文章〔吉田訳『各版対照人口論Ⅳ』187-8頁〕。

〔51〕『人口論』の第２版以降の後続諸版にある文章〔吉田訳『各版対照人口論Ⅳ』38頁〕。

〔52〕依光訳『経済学原理（下）』62頁。

〔53〕小林時三郎訳『経済学原理（上）』（岩波書店，1968年）349頁，依光訳『経済学原理（上）』294頁。

〔54〕小林時三郎訳『経済学原理（下）』（岩波書店，1968年）202頁，依光訳『経済学原理（下）』164頁。

〔55〕『人口論』の第３版以降の後続諸版にある章句〔吉田訳『各版対照人口論Ⅳ』103-4頁〕。

〔56〕第５版『人口論』の付録より〔吉田訳『各版対照人口論Ⅳ』280頁〕。

〔57〕シーニアとマルサスとが1829年３月15日から４月９日までに取り交した５通の私信は，Nassau William Senior，*Two Lectures on Population*（London：John Murray，1831），pp.55-90に所載されている。

〔58〕シーニアの３月15日付のマルサス宛手紙より〔Senior，*op. cit.*，pp.56-7〕。

〔59〕シイニア著高橋誠一郎・濱田恒一訳『経済学（1836年）』（岩波書店，1929年）104頁。

〔60〕Senior，*op. cit.*，pp. 58-9が改変されて，引用されていると推察される。それはシーニアの３月15日付のマルサス宛手紙の一部。

〔61〕マルサスの３月23日付のシーニア宛手紙〔Senior，*op. cit.*，pp.65-6，72〕。

〔62〕第５版『人口論』の付録より〔吉田訳『各版対照人口論Ⅳ』290-1頁〕。

〔63〕高橋・濱田訳『経済学』102頁。

〔64〕リカードウの1816年１月２日付のマルサス宛手紙〔中野正監柔訳『リカードウ全集Ⅶ』（雄松堂書店，1971年）２頁〕。

〔65〕リカードウの1817年10月21日付のマルサス宛手紙〔『リカードウ全集Ⅶ』237-8頁〕。

〔66〕アンダーソンが1790年末から94年にかけて１部６ペンスという廉価で編集し，発行した週刊誌〔拙論『マルサス人口論の源泉 —— 17-18世紀文献復刻集成 —— 別冊日本語解説』（ユーリカ・プレス，2006年）30頁〕。

〔67〕『土地への資本投下に関する一論』（1815年）〔Ｅ．ウェスト著橋本比登志訳『穀物価格論』（未来社，1963年）5-75頁〕のこと。なおこの著の内容，検討については，西山久徳著『差額地代論の研究』（三笠図書，1962年）238-64頁等を参照。

〔68〕依光訳『経済学原理（下）』328-9頁。

〔69〕「商品の供給」（1825年５月），「商品の価値」（1827年11月）のこと〔入獎「王

立学術協会におけるマルサスの２報告」『松山商大論集』第39巻第２号（松山商科大学商経経究会，1988年）225-46頁〕。

〔70〕マルサスが『エディンバラ・レヴュー』誌と『クオータリー・レヴュー』誌とに寄稿した諸論は，Bernard Semmel ed.，*Occasional Papers of T. R. Malthus*（New York：Burt Franklin，1963）に収録されている。

〔71〕中世以来のパンの公定価格制度のこと。マルサスはA．スミスと共にこの廃止を唱えた〔ロバアト・マルサス著堀経夫・入江奬訳『食料高価論』（創元社，1949年）40-1頁，および山根徹也著『パンと民衆』（山川出版社，2003年）21-2頁を参照〕。

〔72〕堀・入江訳『食料高価論』17頁。

〔73〕リカードウは1814年にグロスター州のミンチンハンプトン（Minchinhampton）にある5,000～6,000エーカーのマナーを購入，所有した〔中村廣治著『リカードウ評伝』（昭和堂，2009年）９頁を参照〕。ちなみにリカードウはそこにあったガトコム・パーク（Gatcomb Park）の邸宅の購入も含め，総額６万ポンドを支払った。

〔74〕小林訳『経済学原理（上）』353頁注１，依光訳『経済学原理（上）』298頁注。

〔75〕『東インド会社の文官の養成施設に関する閣下の所見に触発されてグレンヴィル卿に宛てた書簡』（1813年４月）と『東インド・カレッジに関する声明書，最近株主総会においてカレッジに対して提起された非難に事実に基づき反論する』（1817年１月）のこと。なおこれらの書物はそれぞれ学生たちがカレッジで1812年や1815年に騒動を起こした後に刊行されている。またこれら二著の概要と分析については，さしあたり拙論「マルサスの東インド・カレッジ擁護論」『長崎県立大学論集』第35巻第４号（長崎県立大学学術研究会，2002年）を参照。

〔76〕リカードウの1816年10月５日付のマルサス宛手紙〔『リカードウ全集Ⅶ』83頁〕。

〔77〕リカードウの1821年11月27日付のマルサス宛手紙〔中野正監訳『リカードウ全集Ⅸ』（雄松堂，1975年）125頁〕。

〔78〕リカードウの1815年１月13日付のマルサス宛手紙〔中野正監訳『リカードウ全集Ⅵ』（雄松堂，1970年）195-6頁〕。

〔79〕リカードウの1816年５月28日付のマルサス宛手紙〔『リカードウ全集Ⅶ』41頁〕。

〔80〕リカードウの1815年３月14日付のマルサス宛手紙〔『リカードウ全集Ⅵ』220頁〕。

〔81〕リカードウの1820年10月９日付のマルサス宛手紙〔『リカードウ全集Ⅷ』312頁〕。

〔82〕リカードウの1820年５月４日付のマルサス宛手紙〔『リカードウ全集Ⅷ』208頁〕。

〔83〕リカードウの1823年８月31日付のマルサス宛手紙〔『リカードウ全集Ⅸ』425頁〕。

〔84〕このマルサスの追憶はエンプソンの発見によるものと推察される〔ボナア（Bonar, James）編中野正訳『リカアドのマルサスへの手紙（1887年）』（岩波書店，1942-3年）下巻219頁註を参照〕。

〔85〕この点については，さしあたり榊原巌著『社会科学としての英国古典派経済学の研究』（平凡社，1961年）254-64頁を参照。

〔86〕永井訳『人口論』220頁。

〔87〕永井訳『人口論』226-7頁註12。

〔88〕ペティー（Petty, William，1623-73）の末裔であるランズダウン侯は1834年５月にロンドン統計協会の会長に就任した。マルサスは同協会の27名の協議員のうちの一人であった〔拙訳「再興せしリチャード・ジョーンズ」『長崎県立大学論集』第37巻第４号（長崎県立大学学術研究会，2004年）352頁注22〕。

〔89〕マルサスはホランド卿の音頭取りで1798年にロンドンで設立された「キング・オブ・クラブス（King of Clubs）」に，1812年４月４日に入会し，それが解散される24年までこの会を退会することはなかった〔飯田ほか『マルサスと同時代人たち』86-7頁，252頁注48〕。ちなみにランズダウン侯もその会員の一人であった。

〔90〕マルサスは1824年にオークウッドの終身牧師補職を与えられていた〔プレン『マルサスを語る』13頁〕。

〔91〕ブレイク（Blake, William，1757-1827）の友人で，風景画を得意としていたリンネルは，1833年２月15日（水）から当時67歳のマルサスの姿を写生と油絵で描き始めた。また同年３月13日には，マルサス夫人（Harriet，1777-1864）の肖像の描画にも取りかかった〔ボナア著堀経夫・吉田秀夫訳『マルサスと彼の業績』（改造社，1930年）594-5頁，Patricia James，*Population Malthus*（London：Routledge & Kegan Paul，1979），pp.427-8〕。なおその色鮮やかな銅版画は，南『マルサス評伝』に口絵としてそう入してある。

〔92〕訳者の検索の及びえた限りでは，この一節を『道徳および政治哲学の原理』（1785年）の中に見出しえなかった。該当する個所は Paley，*op. cit.*，pp.162-3ではあるけれども同じ文章は見当らない。また同様に訳者が検索した範囲で

は，*An Analysis of Paley's Moral and Political Philosophy, in the Way of Question and Answer, for the Use of Student*（London，1824：reprinted ed.，La Vergne：General Book，2009）の中にもこれと一致する一節は見出せなかった〔*Ibid*.，p.77を参照〕。

〔93〕新救貧法は1834年８月14日に成立したけれども，けっして厳格に運営されていたわけではなかった。その実相は，例えば，「中央の統制にもかかわらず，救貧行政は末端の『貧民保護委員会』の大幅な裁量にゆだねられ，労働可能者への『ワークハウス外救済』が黙認されており，『新救貧法』の基本原則は順守されなかった。加えて多数の慈善組織も救済を行っており，慈善対象者が救貧法の『ワークハウス外救済』受給者と重複することが多く，状況はますます混乱した」と概説されている〔江里口拓著『福祉国家の効率と制御』（昭和堂，2008年）110頁〕。

〔94〕経済学クラブは1821年４月30日にフリーメイソンズ・タヴァンにおいて結成された。以降，毎年，12月から６月にかけての各月の第一月曜日に開催されていた。但し，1830年５月以後の月例会は各月の第一木曜日の開催に移された。マルサスはこのクラブの発足時からの会員で，1821年４月から1830年６月までに開かれた67回の定例会のうちの56回の会に出席している〔中矢・柳田『マルサス派の経済学者たち』59頁〕。ちなみに，マルサスがしばしば足を運んだキング・オブ・クラブスの例会は第一土曜日に開かれていた〔拙論「マルサスの東インド・カレッジ擁護論」100頁注６〕。

〔95〕政治経済学に関してバークとマルサスとを対比しようとした研究として，中澤『イギリス保守主義の政治経済学』第９章があり，そこでは「はっきりと異なる二つのタイプの『イギリス保守主義の政治経済学』」と主張されている〔同書221頁〕。

〔96〕マルサスはタッカーが盲目になってまで完成させた『自然の光明』（1768年）から幾つかの教理を学んだと解されている〔ボナア『マルサスと彼の業績』444頁〕。けれども「タッカーの『自然光明』の中に…ペイリーやマルサスにみられる神学性はあまり見受けられない」とする異論も提出されてきている〔大村照夫著『アブラハム・タッカー研究序説』（晃洋書房，2003年）83頁〕。ちなみにマルサスの父ダニエルは1759年にオックスフォードの同窓生であるタッカーから「ルッカリ」を購入したとされている〔南『マルサス評伝』９頁〕。

〔97〕ウィンショーは良家であるチェシャー（Cheshire）家の出身で，マクレスフィールド文法学校を経て，牧師志望でケンブリッジのトリニティ・カレッジへと入学した。けれどもその在学中に片足を失い，コルク製の義足を装着することとなった。そして1789年に心機一転，法廷弁護士を志しグレイズ・インの門を叩いた。その後リンカーズ・インに勤務したり，会計検査官となったりした。また1805年から15年までダラムの大法官の職を果した司法改革者のロミリー卿（Romilly, Sir Samuel, 1757-1855）とは親友であった。さらにキング・オブ・クラブスにおいても主導的な役割を演じ，1817年に同会に入会してきたリカードウに政界入りを勧めたりもした。短軀で，ずんぐりした体つきで，語り口は不愛想であった。なおマルサスとの親交はケンブリッジ在学時からのものであった〔『リカードウ全集VI』76-7頁注６〕，P James, *op. cit.*, pp.26, 83-4, 424，および飯田ほか『マルサスと同時代人たち』102-7頁〕。

〔98〕スミスはイートン校卒のリヴァプールの銀行家の息子で，1787年に第８位の成績でケンブリッジ大学を卒業した後，1793年にピーターハウス・カレッジの特別研究員となった。その後1806年に学生指導教員となり，翌年にはケンブリッジ大学の近代史担当教授に就任した。スミスはケンブリッジ大学在学時以来のマルサスの友人で，マルサスはスミスを介してウィルバーフォース（Wilberforce, William, 1759-1833）を中心とするクラパム派の福音主義者を知ることになった〔P. James, *op. cit.*, pp.26, 48, 82, 141，ならびに吉尾『社会保障の原点を求めて』第２部第２章を参照〕。

〔99〕依光訳『経済学原理（下）』335頁。

〔a〕例えば，グリーン（Green, Joseph Henry, 1791-1863）は1817年にコールリッジの知人となり，その後も親交を深め，『論理学』の遺稿を保管していた。またケンブリッジ出身の思想家のスターリング（Sterling, John, 1806-44）はヘア（Hare, Julius Charles）と共に神学の遺稿を頂っていた〔高山信雄著『コウルリッジ研究』（こびあん書房，1984年）485，495頁，またボナア『マルサスと彼の業績』71頁注３も参照〕。

〔b〕コールリッジのマルサスに対するすさまじいばかりの指弾については，ボナア『マルサスと彼の業績』510-5頁等を参照。またコールリッジが所有していた第二版『人口論』の中には，「『馬鹿』，『うすのろ』，『愚か者』，『著者の馬鹿げた無知』，『意味があって実質的な内容は８行だけで，それ以外…は無意味な繰

り返しだ』といった書き込みが残されている）〔プレン『マルサスを語る』15頁，また『ケインズ全集10』115-6頁も参照〕。

〔c〕上の引用文は，『ケインズ全集』111頁で反復されている。